
Cool Sky

剣一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cool Sky

【Nコード】

N5775C

【作者名】

剣一

【あらすじ】

久遠燈也と冷河空は今まで一緒にいた。これからも一緒だと思っていた。けれど病魔は突然空の体に現れた。日々弱っていく空、見守る事しかできない燈也。それでも必死に互いに支えあつてすごしていく。久遠燈也と冷河空の2人が織り成す淡く、切ない物語。

【プロローグ】（前書き）

本当に淡く、切ない物語を書けるかは正直まだ分からないし、読者の人達がそう思ってくれるかも分かりません

ただこの作品の全てを読み終えた時にもう一度読みたいと思ってくれる作品を書けるように頑張っていきたいと思います

【プロローグ】

いつもと変わらないある朝

「ん」

俺を夢から無理やり呼び出した携帯の目覚まし機能を止めて、伸びを一回して動きだした。

夏の終わりが近いがそれでも毎朝毎朝うだるような暑さである。起きた俺は学校の支度を急いでし始める。

少しすると、玄関のチャイムが鳴り、

「おーいー燈也、学校に行くぞ。早くしろー」と俺には聞き慣れた少女の声が聞こえた。

今呼ばれたとは俺の事だ。一応紹介すると俺の名前は「久遠^{クトウ} 燈也^{トウヤ}」だ。

学校の鞆を持ち、俺は急いで家を飛び出した。

「空、おはよ、今日もありがとな。」

「私が呼んだら、30秒で来いといつも言っているだろう。」

「いやいや、無理に決まってんじゃん……」

俺が今話しているこの美人は「^{レイカワ}冷河^{ソラ} 空」。

この空と俺は俗に言う幼なじみという関係だ。

こんな美人が幼なじみで幸せって言う奴がいるが、そいつは現実を知らないだけだ。

美人って言っても、嘘を知らないのか、どんな事でもワンクッションも置かずにはっきりと言う。その上、無表情で何を考えているのか分からない。それだけではなく…

「早く行こうぜっ」

バゴッ

空はめっちゃくちゃ強い……

鈍い音が朝の静かな住宅街に響く。

「いてっ！！殴るなっつうのっ！！」

「遅れた燈也がそう言う事言える立場ではないだろ。」

大袈裟な表現かと思うかもしれないが、本当にこんなもんなんだ。だって、空手や剣道などの段位持つてるんだぜ？

師範にも大会に出たら必ず優勝するって言われてるにも関わらず大会に出ないのは本人曰く

「面倒くさい」らしい……

まあ、それでも空はいつもと変わらず今日も俺の迎えに来てくれていた。

家が隣の空とは幼なじみだけあって、幼稚園からの腐れ円だ。

昔は毎朝毎朝俺の所に来て、行きたくないとだだをこねている俺を母親と共に無理やり連れていく空のことが俺は大嫌いだった……

（恐ろしくて逆らえなかったしな……）

だけど今では”あまり”気にならない。むしろそれが俺の日常の一部となっていた。それによって俺はめったに遅刻をしない。

「やっぱ、慣れかな」

「どうした？」

「いや何でもない。」

「独り言か？気持ち悪いな。」

「うるせえ。つかもう少し登校遅くしない？」

「何を言っている。早起きは体に良いんだぞ。」

「いや……そうは言っても、まだ朝6時だぜ？」

「誰が毎日わざわざ早起きして、挙げ句の果てに迎えに行つて、さらに学校で勉強を教えているのかな？」

「へいへい、さーせん。」

「何だ？その態度は。」

「ご、ご、ごめんって。」

「許さん。今日は数学とその腐った性根をみっちり再教育してやる。」

「表情を変えずに言っているが、長い付き合いの俺には分かる。空はきっと楽しんでいる。」

「ハハッ」

もちろん俺もただけだね。

「この状況で笑うとは良い度胸だな……」

前言撤回、まじでやばいかもしれんね……

そんないつもと変わらない会話をしながら俺達は学校に行った。

この日も何気ない、俺達の1日が始まると思っていた。

【プロローグ】（後書き）

後書きのコーナーです

ありがとうございます

自分の作品が初めての方もそうでない方もそんなの抜きにこの作品をここまで読んで頂きありがとうございます。

この作品は自分が2ちゃんねるのあるスレで書ききれなかった作品を自分なりにしっかりと終わらせたくて書きました。

ただそれにあたり、そのスレでは主人公の事を『男』や『女』などで括ってしまうのですが、散々悩みやはり名前をつける事にしました。

だからこの作品の名前のある登場人物には色々ありますw

これからの後書きではその設定などを書いていきながらも、後書きオリジナルのお話（？）みたいなを書きたいと思います。

この作品の半分は書けているので近いうちに少しずつ投稿していきたいと思います。

とりあえず、以降の作品も少しだけでいいので楽しみにして下さい。（他のたくさん作品を読み終えた後に流し読み程度でもいいんで……w

まだまだ未熟者と思われる方もたくさんいると思いますが、未熟者なりに一生懸命書いていきたいと思っています。

2007.8.28

剣一

【第一話〽全ての始まり〽】（前書き）

第一話投稿します

この話から2人の物語は動き出します

ぜひ、読んでいって下さい

【第一話 全ての始まり】

熱がこもってしまっている体育館での朝会はかなり辛い。朝、空の特別超スパルタ授業を受けた、受けていない関係なしでだ。

もちろん今日も空に勉強を教えてもらっていた俺は熱気と睡魔に必死に耐えていた。

「…であるからして…」

今日も校長の話は長い。あまりにも暇になった俺は退屈しのぎに近くの空に話しかけた。

「今日もあのハゲは話が長いな」

「あ、あだが、あのハゲ校長もか、髪が無い事を気にしているのだからハゲ、ハゲ言ったらか、可哀想だぞ…ハアハア…」

（俺よりハゲって言いまくりだよ…）

空は校長を俺よりきつく罵倒してはいるものの、額に脂汗をかなり浮かべ、明らかに顔色が悪かった。

「空、どした？大丈夫か？何か顔色すごいぞ。」

「質問ばかりだな。ちよつとくらくらしているだけだ。あまり気にするな。」

「いやいやくらくらってやばいんじゃないのか？保健室行った方がいいんじゃないか？」

「あ、いや、だい…あ…」

俺の見ていくなかで空が倒れていく。空の特徴的な綺麗で長い黒髪が俺の目の前でなびいていた。

ドサッ

「おいっ空！？空ああ！？」

俺は全身の血の気が引いていくのがはっきりと分かった。

俺は必死に動こうとしてはいるのだが、俺の体は全く動こうとしない。いや、動けない。

空が倒れた音や俺の叫び声などによって事態に気付きだした生徒達が徐々に騒がしくなっていく。

そんな中、慌ててやって来た教師達によって空が運ばれて行くのを俺は何もできずにただぼーっと突っ立って、見ていた。

そんな時俺の肩を誰かが叩いた。

「おい燈也、燈也？どうしたお前も具合悪いのか？」

それは悪友の内藤だった。内藤の声によって俺は急に現実に戻された。

「ほれ、早く冷河のとこ行ってきたよ。」

俺は内藤の予想外の言葉に驚いた。

「担任には俺が言つといてやる。早くお姫様んとこ行ってこいつて俺が行かせなかったなんて冷河に知られたら、俺がやばいからな。」

内藤はちよつとふざけた口調では言っているが、顔は似合わないほど大真面目な顔だった。

「あ、ありがとな…ちよつと保健室に行ってくる。あ、キザなセリフは似合わないあぞ。」と内藤に告げ、俺は急いで走り出した。

空が倒れたことにより朝礼は軽い混乱が起きていて、抜け出すことは難しいことではなかった。

「大丈夫…大丈夫…」

俺はこう呟きながら保健室に向かって必死に走って行った。

【第一話〱全ての始まり〱】（後書き）

第一話、読んでいただきありがとうございます

今回の後書きでは主役2人の本編には出てこない裏設定wを書きます
まずは主役の久遠燈也！！

こいつはドクオってキャラ（AA）がモデルです

クドウって名前はドクオを並び替えるとできますw

次はヒロインの冷河空！！

このモデルは素直クールです。この素直クールとはクーと呼ばれる
事があるんですよ

空って名前は本編ではソラと呼ばれますが、この空って漢字、読み
方を変えるとクウですよね。クーを縮めてクウ、そこから名前がき
ました

名字の冷河はクールは冷たいとかの意もあるのでそこからきました

まあ2人の裏設定はこんなもんですかね……

まあ正直分かる人にしか分からない内容なので……

これからも裏設定があるときは裏設定、ないときはつまらない俺の
話、そして5の倍数の話では………

5話まで待つてて下さいね〱

ではでは今日はこのくらいで……

次回もよろしく願います

以下再編集部分

え〱前回の最後にですね日付をいれて終わらせたんですよ……

完璧今回の後書きでは忘れてましたwww

だから気付いた今日の日付を……

2007.9.4

剣一

【第二話「長い一日」】（前書き）

第三話投稿します

読んでみてください

【第二話　長い一日】

保健室には先生が1人いるだけだった。

「せ、先生、そ、空は？」

「冷河さんなら今ベッドで横になってるわよ。」

正直、俺がなぜここにいいのか何も聞かないでくれた事はとても助かった。ただ俺から離れながら

「若いわね…」と呟いていたのが聞こえた。

俺は静かにベッドに近付き、閉められていたカーテンの隙間から頭をいれた。

「君は女性が寝ているベッドに何も言わずに近付くのか？」

笑みを浮かべて俺を見つめている空が横になっていた。

「ご、ごめん…で、具合は？」

「フフ…君のそのような突拍子な行動にはもう慣れた。昔も私が部屋にいた時…」

「ああ…その話はいいつ…！ぐ・あ・いはどうなんだ？」

空がいきなり昔の俺の事を語り始めようとしたので俺は無理矢理遮った。

多分その話とは昔小学校の低学年くらいの頃の事だろう。昔、空の部屋の方からいきなりドゴンッ！ドゴンッ！と音がしたかと思うと、変な叫び声が聞こえ始めた。

幼心に空の身の危険を感じた俺はほとんどくっついていて自宅と空の家の屋根を走り、空の部屋の窓を開けて、飛び込んだのだ。

飛び込んだ俺の目に入ってきたものは散らかった部屋の真ん中で、少し前に買ったという子猫を抱いて、服を乱れさせていた空がいた。

忘れたくても忘れられないその時の空の言葉…

「君は何をしているのかな？」

空は昔からこんな話し方だった。

俺は事情を言う前にその場で俺は空によってボコボコにされた。

その後聞いたところによると空は子猫が空の部屋で逃げ回るので捕まえようとしていたのだが、子猫がかなり走り回りつていたらしい。

そこを俺が丁度窓から入って来て、その行動を俺が覗きに入ると空が勘違いして俺を半殺しにしたのだ。

俺は当然両親からこぴつどく絞られた。

空は少ししてから俺が覗きではなく、心配で来たという事を理解し、”半殺しにしたこと”については謝ってくれた。

恥ずかしき俺の昔話ここで終了

「まあ…とりあえず私は貧血らしいから、病院に行く事になった。

今日は早退する。」

「そうなのか…分かった。荷物でも持ってこようか？」

「珍しく気が利くじゃないか。」

そこには幼なじみを心配に思う、何気ない会話があった。俺達は今までお互いに何かがあると、なんだかんだ言いながらも助け合って過ごしてきた。

この後俺は空に荷物を渡し、授業を空の心配をしながらも真面目に受けて過ごしていた。空のためにノートもいつもより少しきれいに書いてみた。

（他のページ見られたらばれるよな……）

空が早退して数時間後、特に何も起きずに学校が終わり俺は家に付いた。

玄関に荷物を置き、空の家に行く。

空の家のチャイムを数回押しても、空の家からは誰も出てこなかった。

（空、大丈夫かな？……）

結局、どうしようもなくなった俺は空へのメールを送っておいた。

そのメールの返信が来たのは夜になってからだった。

「遅くなってすまん。医師によると体調があまりよくない状態らしいから学校を数日欠席する事になった。担任には母親から連絡してくはずだが、私の友達から聞いてきたら心配ないとも言っておいてくれ。」

明日私が迎えに行けないが遅刻はするなよ。もし遅刻していたのが分かったらぶつ飛ばすからな。」

俺は空のメールを確認するとすぐに返信の文を打ち込み始めた。

「わ、分かった。」

遅刻はしないように”努力”はするよ。

無理するなよ。

お大事に、おやすみ…」

「よし、そーしんっ」

（つか、空のぶつ飛ばすは俺を地球の裏側までぶつ飛ばしそうだが……）

「ああゝねみいゝ」

俺はぐだぐだ言いながらも、空のせい（おかげ）で日課となっている予習、復習をしつかりとこなしてから眠りについた。

夢の中で俺はあの桜並木を歩いていた。

一步一步あの日や今までの俺の記憶を確かめるように。

【第二話〜長い一日〜】（後書き）

こんにちはーっ

第三話です

今回はどうでしたか？

最近、このサイトでの執筆ばかりの毎日で俺のサイト放置状態っすw
人間あれこれ手をだしちゃいけないもんですね（まだしっかりして
いない時は…

燈也の長かった1日はこの話で終わるかな？w

まあ…とりあえずまだまだこの2人の話は続くのでたまに読みに来て
下さい

よろしくお願いします

【第三話『桜並木の君』】（前書き）

えー…前回前書きやらで第二話なのに第三話と書いてありました
すいませんでした

今回は本当の第三話
『桜並木の君』です

【第三話　桜並木の君】

「燈也、早くしろ。」

「お、おう。」

まだ俺の体に馴染んでいない制服。俺は玄関先でまだ新しい革靴を俺の足に押し込み、家の前で待っている空の所に行った。

「おはよう。」

「はあ……」

俺の顔を見た瞬間、空は一つ大きなため息をついた。

「人の顔見てため息つくなよ。」

「違う、君の顔じゃなくて、君の格好だ。」

「え？」

俺が自分の確認をしようとした時、空の白い手が伸びてきた。

「ネクタイが曲がっているんだ。」

「あ、ありがと。」

（空の顔が近い、良い香りだ……つかいつからこんなに綺麗に……）

俺の思考は空の拳によって遮られた。

「燈也、早く行くぞ。あ、おば様おはようございます。」

俺の後ろにはいつの間にか母親が立っていた。

「空ちゃん、おはよう。また綺麗になって……もううちの馬鹿息子の面倒なんかいいから、さっさと良い男見つけなさいよ。」

「私が面倒見てないと、燈也は何もしないと思うので。」

「それはそうだけどね、燈也はもういいわよ……じゃあ空ちゃん、燈也行ってらっしゃい。」

「おば様行ってきます。」

「行って来ます。」

高校の始業式が始まった。

人の多さには驚いたが、それに見慣れてしまうと、後はただ退屈な

だけで俺はあくびを押し殺してただけだった。

あくびをしないのは先程あくびをした時に偶然こっちを向いていた空ににらまれたからだ。

俺がうつとうとしている間に始業式は終わった。俺はのろのろと立ち上がり、とりあえず一年間一緒に過ごすクラスメート達と教室に向かった。

結局、高校生活の1日目はあつという間に終わった。

俺が上履きを履き替え、外に出ようとした時に何かで頭を殴られた。

「いつてえな！」

振り向いた俺の前には学生鞆を前に持つ空が立っていた。

「何分待ったと思ってる。」

「文句は俺の担任に言ってくれ。」

「さあ、帰るぞ。」

校門までの校庭には部活勧誘の先輩が帰宅しようとする新1年の生徒に片っ端から声をかけていた。

前を歩く空はかなりたくさんさんの部活から勧誘されていた。そのおかげで後ろを歩く俺があまり激しく勧誘されないのはラッキーだ。

だがよくよく考えてみると、俺1人で帰る訳ではないので、結局早くは帰れないのだ。

「すいません、私どこの部にも入部の予定はないです。もちろんマネージャーもやりません、失礼します。あーもう…燈也ー」

どんな事も戸惑いなくズバズバと言う空も先輩の多さとあまりにしつこさにいよいよ俺に助けを求めてきた。その瞬間

「ぜひ我が部のマネージャーに！！」と必死になっていた先輩（男）の目線が空から俺に変わった。

（あー…殺気を感じる…俺…付き合ってる訳じゃないんだけどな…）

中学の時からこんな勘違いは良くされていた。慣れていると言えば確かに慣れているが、やはり喜ばしい事ではない。

「そ、空早くしろ。」

完全にアウエーとなってしまったこの場から逃げ出したかった俺は空の手を握り、どんどん進み始めた。

「ふーお前の人気も何とかしてくれよ。」

やっと学校の敷地内から出た俺達は徐々に散り始めた桜並木を歩いていた。

「そうは言ってもしょうがないじゃないか。」

空は後ろ手で鞆を持って俺の数歩前を歩いていた。

空が一步步度度空の特徴的な長い髪が揺れ、風が少し吹く度に咲き誇っている桜の花びらが舞っていた。

「燈也…」

横の桜を見上げていた俺は空の方へと視線をやった。

「ん？」

「これからもよろしく。」

前を歩いていた空が振り返った。

桜の花びらが舞う中、空の綺麗な髪がなびいた。

「燈也、これからもよろしくな。」

「あ、ああ…」

（何だ…この変な感じ…）

「ほら、燈也帰るぞ。」

「お、おう。」

（まあ、いつか…）

俺は変な感覚を覚えたが、それは空の言葉で曖昧になってしまった。

【第三話『桜並木の君』】（後書き）

今回もありがとうございます

早いもので読者が100人突破しました

新しくされたユニーク表示と総表示に分かれて結構分かりやすいです

さあ今回の話では空と燈也の入学式のお話です

今回の物語はかなり急に入れたんです

当初の予定では昔話なんて全くなかったんですが、どっかの作者が

「回想いれないなあ…」

「もつと互いが学生のシーンいれないなあ…」

「空が元気な時みたいなあ…」

とやら何やらの思い付きで書きました

まだまだ2人の物語は始まったばかりです

皆様温かい目で2人を…むしろ自分を見守ってくださると嬉しいです

でわ次話でまた会いましょう

【第四話】不安、約束、決意】（前書き）

こんばんは

第四話の【不安、約束、決意】を投稿します

今回は後書きもぜひ目を通してみて下さい

でわ本編スタートです

【第四話　不安、約束、決意】

それから数日後空は何事もなかったかのように俺の迎えに来た。

「休んでいた間遅刻はしてないか？」

いつもと変わらない朝

「第一声がそれかよ…俺だって心配したんだぞ？」

いつもと変わらない会話

「ほう…ありがとな。燈也が心配してくれるとは驚きだな。しかし私も燈也が遅刻をしていなかったか心配だ。」

いつもと変わらない風景

「大丈夫、約束通り遅刻はしてない。まだ死にたくないからな。…で、病気は大丈夫か？」

動き出す歯車

「それはどういう意味か聞き出す必要があるな。とりあえず病気の事だが…検査で何か引っかけたかって来週から再検査のため入院をする事になった。まあ大丈夫だろう。」

止まらない時

「にゅ、入院って大丈夫なのか？何かあったらいつでも言ってくれ

よ。」

響く言葉

「燈也は優しいな。」

気付かぬ現実

「毎日でも見舞いに行つてやるよ。」

約束

「ふっ…嬉しいがちゃんと勉強はしてくれよ。私のせいで成績が落ちたら、責任を感じてしまう。」

笑顔での約束

「成績は下げるかも分かんが、毎日はず行く。今決めた。」

固い約束

「ハア……決めたならもう燈也は私が何を言っても聞かないから好きにしる。」

そして空は再び入院した。

俺は言った通り毎日病院に行った。そして、面会時間終了ギリギリまでずっと側にいた。

空の病室にいる間、2人の間で話が尽きることはなかった。

「ちゃんと勉強はしてるのか？」

少しやつれた顔の空が聞いてくる。空は日に日に痩せていつていた。

「ああ…ちゃんとやってる。病人は人の心配してないで、自分の体

を心配しとけよ。」

俺はその言葉の通り今まで以上に勉強に取り組んでいた。

「そう言えば入院はいつまでかかるんだ？」

「私もまだ分からないんだ。お母さんに聞いてもまだ分からないらしいし。」

今、俺の目の前にいる空はいつもの何事もクールにこなしていく空ではなく、先の見えない入院生活に怯えているまだまだ少女である空だった。

「大丈夫だって。これからも俺が側にいてやるよ。」

「フム…君は恥かしげもなく、よくそう言う事を言えるな。だが今回はそれに甘えさせてもらおう。」

「今までだって側にいたんだから、もう当たり前の事みたいなものだよ。」

「そこまで燈也が言うならしょうがない。仕方ない、私もこれから一緒にいてやるう。正直、燈也のご家族から燈也の教育としつけを頼まれてるからな。」

「ありがと…つか俺はガキ扱いかよー!!」

「私の前では燈也はずっとガキだぞ。」

「うるせえ!」

「ほう…燈也は私にそんなに言えるまで成長したのか。」

空が冷え切った目で俺を睨んできた。

俺の背中を寒気が駆け巡った。

「あ、いや…その…そんなつもりじゃ…」

空が俺のうろたえる姿をじっと見つめてきた。

（やばい!やばい!やばいよ!俺!）

「フツ…フフフ…フフ…」

俺の姿を見ていた空は急に吹き出した。呆気に取られた俺は何も言えずにただ呆然としていた

「フフ…やはり燈也はまだまだ私がいないとだめだな…フフフ…」
空は手で口元を隠して笑いを堪えながら、そう呟いた。

俺は時計をチラッと確認して、ゆっくりと立ち上がった。

「さて…そろそろ帰らなきゃいけない時間だ。また明日来るな。」

「毎日来なくてもよい。むしろ来るなと何度言ったら…」

「空、じゃあな。」

空の説教みたいな言葉を遮りながら俺は病室を出た。

帰るためにエレベーターに乗ろうとすると、そこには空のお母さんがいた。

「おばさん、こんにちは」

「あら、燈也君じゃない。今日もありがとうね。今日は燈也君が来る前からちよつと主治医の先生とお話してたのよ。」

おばさんは微笑んではいたが、その微笑みはかなり無理をして作っているように見えた。

乗ったエレベーター内で俺は独り言のゆっくりと呟いた。

「そ、その…空の病気は…」

俺が尋ねた時少しおばさんの表情が変わった気がした。

「まあ…大丈夫よ…それより燈也君が無理して病気にならないか私はそっちの方が心配よ。」

「お、俺は全然大丈夫ですよ。」

「フフ…頼もしいわね…」

こうゆう時の笑い方は空ととても似てると思う。

俺はそんな事を考えていたが、エレベーター内では徐々に気まずい雰囲気が充満していった。

1階についた事を機械の声が知らせると同時にエレベーターのドアが開いた。

「あつおばさん、俺、今日は自転車なんで…」

「分かったわ。ありがとね。本当に無理しないでね…」

「ありがとうございます、では失礼します。」

おばさんと分かれた俺は自転車置き場に向かい、まだ愛用しているMDのスイッチをつけ、自転車にまたがり、病院を後にした。

MDから俺の耳へと流れでる音楽がアップテンポな曲から一転、悲しいバラードに変わった。

俺は歌詞のように会えなくなる”2人”が頭に浮かんだ。

「…んな訳ねえよな…」

嫌な考えを振り払うように俺は更にスピードを上げて、見慣れた街並みを走り抜けていった。

【第四話　不安、約束、決意】（後書き）

作者「今回は5回目の後書きという事で特別コーナーです。本編のイメージ崩壊の可能性もあるので、イメージ壊したくない方は読まない方がいいかと思います」

え？いつものつまらない後書きと同じ？すみません、じゃあ自分は引っ込んで後は任したいと思います。じゃあどーぞー！」

（「A、」 「どーも」 川。-。）

（「A、」 「えー本編で燈也をやらせてもらってるド、ドクオです」 川。-。） 「今回はここまで読んで頂き誠にありがとうございます。私は空をやらせてもらっているクーです。」

川。-。） 「早くドクオ言え…」 （小声）

（「A、」 「えっ！？俺！？えと…今回はプロログも含め、ご、5回目の投稿って事で…えと…ほ、本編にでてるキャラで才話シシタイト思イマス。」

川。-。） 「後半棒読みになってしまった馬鹿はほうっついておいてこれからは定期的にこの座談会をしていきます。」

本編ではまだ私達2人がメインなので、徐々に色々なキャラに私達と一緒にでてもらおうと思っています。」

川。-。） 「今回は残りが少なくなってしまうこの辺りで終了という結果になってしまいました。後書きの文字数を全く頭にいれてなかった作者のせいです。」

もし次の座談会で何か話してほしい話題などがありましたら、お手数ですが作者にメッセージでも送って下さい。まとまらず終わってしまいすいません。」

ぜひ次話もお楽しみ下さい。」

【第五話『儂き君の姿』】（前書き）

第五話の『儂き君の姿』を投稿します

2人の物語は更に走り出します

ぜひ読んでみてください

【第五話　儂き君の姿】

コンッコンッ

それから数日後、俺の手は空の病室のドアを叩いていた。

「空、俺だ。今日も来たぞ。は…」

「入るな。」

入るぞと続けようとした俺の言葉は空の一言によって遮られた。

「えっ!？」

「お見舞いに来てくれたのに悪いが今日は帰ってくれないか？」

その声は静かに俺が病室に入る事を拒否していた。

「わ、分かった…」

俺は病室に入る事を諦めた。しかし、結局俺はどうしようもなく、空の病室に一番近いソファ―に腰を下ろして、1人困っていた。

「どうしたんだろ…いつもの空らしくないな…」

俺はだからといって何もできる事がなく、静かに面会の終了時間が来るのを座って待っていた。

うとうとする訳でもなく、ただぼーっとしていても時間はしっかりと過ぎていくもので、気付くと面会の終了の時間だった。

「帰るかな…」

俺が立ち上がったとしたその時、俺の前で立ち止まった人がいた。俺が顔を上げるとそこには空のお母さんが立っていた。

「燈也君…わざわざ来てもらったのにごめんね……」

「あ、こんにちは。いや、おばさんは気にしないで下さい。俺が勝手に来てるだけですから。」

「いや、でも悪いわよ……」

「いや、良いんです…それより…その…空の病気は…」

（俺はしつこいな……）

自覚はしているのだが、どうしても気になっているので俺はおばさ

んに尋ねてしまった。その瞬間おばさんの表情に陰りがさした気がした。

「その事なんだけど…」

「あまり…良くないんですか？」

「えと…やっぱりこれは空が自分で言うべき事だと思うのよ。」

おばさんはそう答えてくれた。そしてその言葉は暗に俺に対して空はあまり良い状態ではないと俺に教えていた。

その時はまだ”あまり”良くはないだけだと思っていた……

それから数日後に空の病室が変わった。

おばさんに教えてもらった俺はそれでも変わらずに毎日空の所へ通った。

ドアをノックする度に病室の中から帰ってくる返事は

「入ってくるな。」の一言だった。しかし言葉はいつの間にか強くなり

「もう来るな」という一言に変わっていた。

それでも俺は毎日毎日通い続けた。よく考えると空を疲れさせているかもしれないが、止める事はできなかった。

そんな事を続けていたある日。

「いい加減俺もしつこいな…」

俺は自嘲気味に笑い、ドアをノックしようとした。

しかしその瞬間、俺は後ろから聞き慣れた声に呼び止められた。

「あ…燈也君？」

その声の持ち主は空のお母さんだった。

「あっ、おばさん、こんにちは。」

「ちよつと入ってくれる？」

「えっ!？」

おばさんは俺の手を掴むと、俺を強引に空の病室に入れた。当たり前的事だがその部屋のベッドの上に空が座っていて、ただぼ

「と窓の外を眺めていた。しかし、おばさんに引つ張られ入った俺を見ると一瞬驚いた表情になったが、すぐにいつものような顔に戻り、俺を見つめていた。

数週間ぶりに見た空は前会っていた時の空よりさらに酷い様子になっていた。

空の自慢の長い綺麗な黒髪はボサボサになっていた。前会った時も健康的だったとは言えないが、でも今はそれ以上に体はガリガリになり、顔はとてもじゃないが血行の良い顔付きだとは言えない状態だった。

「そ、空……」

「燈也……見られてしまったか……」

俺を見つめていた空は笑顔を作り出した。その笑顔はあまりにもぎこちなく、まるで笑顔の作り方を忘れたが、それでも無理して笑おうとしているようだった。

「お母さん、燈也をもう入れるなと言ったじゃないか。」

「空、ごめんね……けど、あなたは燈也君にちゃんと関わらない事があるんじゃないの？あなたにとって燈也君はその程度の存在だったの？」

おばさんは一気にそう告げると

「……ごめんね……私ちよつと外行つて来るわ……」そう言つて病室を出て行った。その時おばさんの目が一瞬見えたのだが、その目は潤んでいるように見えた。

「そ、空久しぶり……」

俺はそう言つて、初めて自分の喉がカラカラになっている事に気が付いた。

「久しぶりだな……」

空は絞り出したかのような声で話しかけてきた。

「私も逃げてばかりいられなようだな……なあ……」

空は自分に言い聞かすように呟いた。

「燈也、少し屋上に行かないか？」

「外に出てもいいのか？」

俺の言葉を空は昔のように鼻で笑って答えた。

「フツ……燈也、私もそこまで重病人ではない。ほら行くぞ。」

そう言くと空はベッドから立ち上がり、ドアへすたすたと歩いて行った。

結局一人で部屋に残る訳にもいかない俺は弱々しくなってしまった空の後ろ姿を見つめながら無言で空について行った。

どうしたんだ？

もう大丈夫なのか？

なあ…空…

俺は空に対して話したい事がたくさんあるのに話しかけられずにいた。

エレベーターホールでボタンを押す空の指はとてもやせ細っていて、簡単に壊れてしまいそうだった。

エレベーター内では薬の匂いのせいで俺はさらに空がとても弱く、そしてとても儚い存在のように感じてた。

【第五話「傳き君の姿」】（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございます

前書きにも書いた通り2人の物語は今まで以上に動きました
この辺りの内容は前半の山場と言ってもいいくらいだと自分では思
っています

その山場を自分なりに上手く書けたらいいと思っています
次話もぜひ読んで下さい

前回の後書きと今回の後書きの温度差激しいなwwww

【第六話『青空の君』】（前書き）

第六話の『青空の君』を投稿します

今回の話は『Cool Sky』の重要な部分の一つです

多分、全編を通し、素直クルルの空がここまで色々な表情をする話
はもうそうそうないかもしれません
その部分を頭の片隅に起いとして下さい

2人の大切な気持ちと言葉をぜひ読んでいって下さい

【第六話　青空の君】

エレベーターが最上階に着き、俺達2人はそのまま屋上に出た。そこには綺麗な青空が広がり、思いつきり光り輝く太陽が干してあるタオルを余計に白く、眩しくしていた。

空はゆつくりとしかしっかりとした足取りで手すりの所まで行き、青空を見上げた。

俺はと言うと、痛々しい空の後ろ姿を直視する事が出来ずに背を向け、そして俺も無言で空を見上げた。

空はどこまでも青く広がっていた。

何分たっただろうか…それでも俺達2人はずっと空を見上げていた。

空が言葉を選ぶようにゆつくりと話し始めた。

「燈也、今までの事を怒っているか？」

「別に…」

「許してくれるのか？」

「許すも何も、空は悪い事を何もしていないだろ？」

「燈也……」

「なんだ？」

「燈也は私の事が好きか？」

「お前らしくもないな…何だよそれは…」

「友人として好きか？それとも…女として…好きか？」

「え？」

空の言葉の意味を理解できなかった俺は空を見上げるのをやめ、振り返った。俺の目線の先で空はまだ空を見上げていた。

「フフ…もう1度聞いてみよう。燈也は私を好きか？それとも幼なじみという枠からは抜け出せてないか？」

俺は空の言葉の意味を考え始めた。

俺にとって空とは？

腐れ縁？幼なじみ？親友？

分からない…

本当に分からないのか？

嘘だ…

分かっている

離れたくない…

離したくない…

傍にいたい…

守りたい…

俺は今まで生きてきて、空への気持ちに今更ながらやっと気づいた。

空の言葉は俺にやっと自分の奥にあった正直な気持ちを分からせた。

俺は冷河空の事が好きなんだ

きつと今まで自分自身を抑えつけていたのだろう。けれど俺の心の中の鍵は今、空の言葉によってやっとなくなった。

「フッ…」

空はまだ青空を見上げながら軽く笑った。

俺はそつと近づき、今にも崩れていきそうな程弱々しくなってしまう空を後ろから抱きしめた。

「俺は今まで自分の気持ちに気付いてなかった。今やっと気付いたよ…俺は空の事が好きだ。」

抱きしめている時、空からは淡い香りシャンプーのような匂いがした。

（やべえ……ぶっ飛ばされないかな……）

いきなり抱きしめた上に、告白までしたのだ。もしかしたら俺は半殺しにされるのではないだろうかと内心少しだけ怯えてしまっていた。いや、半殺しではすまないかもしれないけれど…

しかし、それでも力を入れたら崩れ落ち、目の前から消えてしまいそうな空の体をむざむざと放す事は出来なかった。

今俺が抱きしめている間は空の温もりを俺の手でしっかりと感じる事が出来たからだ。

俺が空の温もりを感じている間、空は確かに俺の腕の中にいて、どこにも行く事ができなかった。

「燈也も同じだったのか…私も入院して、私の我が儘で会わなくなつて、意地を張つてた。君が来る度に何回も君に会いたくて、声が聞きたかった。それでも自分自身の気持ちが分からなかったし、我慢してた。けれどお母さんが燈也を連れてきて、燈也の顔を見た時私自身の気持ちに気付いた…今までの押し込めていた私の気持ちがやっと見つかった…私も燈也の事が好きだ…」

空はそう告げると、手を俺の手に重ねた。

「フフ…燈也の体は温かいな…私は幸せだ…最高に幸せだ…けどな、私はずるい…」

空は自嘲気味に静かに笑い、そしてこう続けた。

「燈也…私は、私は後半年程の命らしい…」

空はそつと俺の腕をほつき、1歩離れ、こつちを振り返った。

「それでも…それでも私を好きでいてくれるか？」

俺の顔を見つめている空は泣いていた。
空の本当の感情は空の瞳から溢れ出し、頬を濡らしていた。

半年…

確かに何かしらの覚悟はしていた。空の状態や空のお母さんの言動で薄々感じてはいた。ただ、気づこうとしていなかった。しかし、現実はその甘くはなかった。
たった… たった半年だけ…

「は…はあ？…」

「私は真面目に言ってるからな。」

「早すぎるだろ… やつと、やつと気持ち分かったのに…」

俺がそう呟いても、空は俺の事を濡れた瞳で見つめながら、微笑んでいるだけだった。

それでも俺の気持ちは変わる訳がない。

「空… それでも俺は君の事が好きだ。」

「ど、どういう事だ？」

俺の答えが女空思っていた答えではなかったのか、空は珍しく動揺していた。

「わ、私は後半年程なんだぞ？ 私なんかより…」

空がまだ何か続けようとしたので、俺はその言葉の続きをそっと遮った。

「空より大切な人は俺にはいない。ちゃんと言う。俺は冷河空の事が好きです。俺と付き合って下さい。」

「ハア… 全く… 私はこんな男のどこがいいのだろうか… だけど… よろしく願います。私はやはり少しでも君と付き合っていたい。」

そう言った空の顔は泣いていた上に、いつものように無表情だった。しかし、きつと空は心では笑っていただろう。

「…こんな事ならもつと…もつと生きたい…燈也の側にいたい…」
「ならずつとずつと俺の側にいる。俺から離れるな。俺が側にいる。だから一緒にいよう。約束しよう。な？」

空は無言で俺に近付き、俺の胸に顔を押しつけてきた。俺は恐る恐るだが手を回した。

「ばか…」

「バカで結構。これから一緒な。」

空は俺の言葉に一度だけ頷いた。

「ああ…」

空は泣いていたようだが俺は静かに抱きしめていただけだった。

「燈也…本当にありがとう…」

どのくらいたったのだろうか。空は俺の胸から顔を離した。

「気にすんな。空、そろそろ病室戻んぞ。具合悪くされたら困るからな。」

「だから私をあまり重病人扱いするなと言ってているだろう。」

「いや…だからな…そのか、彼女がこれ以上具合悪くなったらこ、困るだろう？」

俺が照れながら言うと、空は少しはにかんでいたが、すぐにいつものように素っ気なく罵倒してきた。

「燈也…真顔でその言葉は気持ち悪いぞ…」

「うつうるせえ」

「ほら、私の大事な恋人よ行くぞ。」

そう言つて空は俺の手を握り、歩きだした。

「こ、恋人つて…あつ引つ張んなつ」

急な空の言葉に戸惑う俺をよそに空は細い腕でぐいぐいと引つ張つて歩いていった。

青空は空のように優しく、澄みきって、広がっていた。
この日俺達の今までとは全く違う、新しい2人の生活が始まった。
半年という期限の中で……

【第六話『青空の君』】（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございます

前書きでも書きましたが、ここが2人の物語の一つの重要点です
今まで『幼なじみ』という大きなものに隠れていた『気持ち』がこの話でやっと光を浴びます

この回で『空』という単語が多様されていますが、自分が青空も曇り空も含め、『空』が好きだからです

もちろんそれだけではありません
でもここでは言いません

「考えてないだけだろ」と思いになる方もいるかもしれませんが、本当に違います

自分の考えでは、小説の作者の意図を「こう思ってたのかな？」と考えるのも小説の楽しみだと思っんですよ

それが作者の意図していた事と違ったとしてもです
作者の意図をこの一つと限定して考えるのは学校の授業だけで十分です

だから自分は自分なりの『空』の意図があり、読者の方々には読者の方々が考えた『空』があるんです

もしかしたらこの後も度々『空』が多様されるかもしれませんが、その時は「また作者の空好きか…」と「この空が表す意味は？」と考えてみて下さい

お読み頂きありがとうございます
次話もよろしく願います

自分で「ここまで書いたか…」と編集集中にちょっと涙ぐんじゃったのは内緒ですw

【第七話〽空を繋ぐ橋〽】（前書き）

第七話を投稿します

今回はちょっと変わったお話です
お楽しみ下さい

【第七話　空を繋ぐ橋】

「ふう……」

唇から溜め息とはまた違った空気が漏れた。

ベッドの上から窓の外を眺める。そこには見慣れた、しかし一瞬毎に変わる物が私を見下ろしていた。

アレは昨日も同じように蒼く澄んでいた。

私の頭は瞬時に昨日の事を鮮明に思い出した。今でも思う。何で私はあんな事を言ってしまったのだろう。

昨日はあいつの顔を見た瞬間に私の心の壁は脆くも崩れ落ちていった。

先日、担当医から告げられた一言は私を真つ暗闇に突き落とした。

しかし私はその言葉を受け止めた。そして覚悟を決めたつもりだった。

覚悟を決めた

だから私はもう二度とあいつやその他の友人達に会うのはやめようと決めた。

もうあいつに会う事はきつとないと思っていた。だから日々私に与えてくれるあいつの優しさを跳ね返していた。

しかしあいつはそんな事全く気にしなかった。何を言おうと変わらずに毎日来てくれた。

私は動揺していた。しかしそれ以上にあいつの毎日来てくれるという行為が徐々に嬉しくなっていた。しかし私は自分自身を隠したままだった。

そんな時だった。

見かねたお母さんがあいつを私の部屋に入れた。

あいつの顔を見た時、私は言わないと決めていた。しかしその決意は簡単に崩れた。

そして、私自身の気持ちが分かった。

しかし怖かった…

もし気持ちを告げて、拒否をされたら…

それでも全てを言わなければいけないと感じた。

私は屋上に行くことにした。多分、看護師の人達にばれたら色々言われるだろう。

それでも、窓の内側からではなく私の目で空を見上げたかった。

私は昔から空を見上げていると、落ち着いた。こんな性格や言葉遣いだから何度もいじめられた事もあった。しかし遠く広がる空はそんな事を気にも止めずに私を見下ろし続けていた。

そして空と同じようにあいつも私の性格や言葉遣いを全く気にしなかった。私よりも弱いくせに何度も自分を犠牲にして私を守ってくれた。

だから多分昨日は私が行く事ができる屋上という最も空に近い場所でなかったら、大切なあいつに対して全てを正直に告げられなかったと思う。

きっと空が、あいつが私を見てくれると思ったからこそ、言葉が出たのだろう。

そして屋上で全てを話した。

私の気持ちを…私の未来を…

きっとあいつは受け止めないと思っていた。

しかし…

しかしあいつはさも当然のように私を、私の気持ちを受けとめてくれた。

その時私の中で何かが弾けた。

未来に対して諦めていた気持ちはなくなった。

もっともっと生きたくなった。あいつの傍にずっといたくなった。

なぜ私の未来はすぐそこで閉じてしまうのだろう。なぜあいつの傍にもっといさせてくれないのだろう。

私は自分自身が恨めしい。

ここまで自分の事を恨んだ事なんてなかった。

でも今は、今は…

あいつの前ではもう少しだけ、もう少しだけ…意地を張ってみようかな…後少しだけ頑張ってみようかな…

私はいつだって強かったんだ。

今まで強く生きてきたんだ。最後まで貫くのもいいじゃないか。むしろ最後まで貫いてやるうじゃないか。

昨日は私の弱い部分あいつにかなり見せてしまったしな…

あんまり弱い部分見せすぎるとあいつが調子に乗るしな…

まあ、でもたまには頼りにするのも悪くないな…

あいつになら…

私は考えをやめ、再び空を眺めた。

肝心な事言い忘れてたな…

燈也ありがとう

【第七話〱空を繋ぐ橋〱】（後書き）

今回のお話はとうだったでしょうか？

空目線から見た第六話の話です

ん〱正直むずかった…

それでも結構勢いで書く事ができました

当初の予定ではこの話は書く予定もありませんでしたし…

何か今日は後書きのネタないなあ…

次か次くらいに新キャラ登場のはずなんでお楽しみにっ！！w

【第八話ゝ思い、想いゝ】（前書き）

八話を投稿します

今回は新キャラが出てきます

ただ、本格的な活躍はまだ少し先になってしまいます

【第八話　思い、想い】

俺は今日もいつものように空の病室にいた。

最近分かった事が2つあるのだが、まず1つ目に空のお母さんは俺達を2人きりにしようとしてくれるのか空の病室にはだいたいは午前に行き、午後はできる限り俺だけにしている。

そして、2つ目は空は友人達に病気の事まだを話していない事だ。

無表情でいつもクール、何事もはつきり言う空にも親友と呼べる存在はいる。もちろん俺もそいつらとは仲良くしている。

それなのにそいつらにでさえ、空は報告するのを拒否していた。もちろん俺がそいつらに言うことも禁止されていた。

俺はその事がずつと気になっていたのだ。

「なあ…空…何であいつらに言っっちゃ駄目なんだ？」

空は1つ大きなため息を付くと、俺と目は合わせずに窓の外を眺めながら話し出した。

「正直言うとな…燈也にもこの私の姿は見えてほしくない。ただの私のわがままだが、私の友人達にも、もちろん燈也にもこんな姿を見せたくないのだ。」

俺は何も言う事ができなかった。

「ただの自己満足で、みんなにも心配させて迷惑をかけているのも分かっているのだから…」

空が額の髪を少し払った。

「強い私でいたいんだよ…」

空がそう呟いた横顔はどこかものさびしげだった。

「なあ…空…」

俺はさらに続けた。

「そんなに強くなかったっていいんじゃないのか？空は空だろ？無理してみんなが持つイメージの空でいようとしなくてもいいだろ…」

空は俯いて俺の話を聞いていた。

「空が別に弱くたって、強くたって空は空だ。俺が、あいつらが知ってる空だよ…冷河空を演じないでいいんだよ？」

俺はそこで言葉を止めた。結局、俺が何を言っても最終的に決めるのは空なのだ。

俺の目線の先で真っ白な空の細い指先が少し震えていた。

「悪いが、そろそろ時間だ…何かあったら電話でもしてくれ。」

「ありがとう…」

俺を見つめた空の目が光って見えたのは俺の見間違いかもしれない。

その夜、空から電話があった。

「もしもし」

「私だ……」

空の声はとても暗いものだった。

「空、どうしたっ？何かあったのか！？」

俺の慌てた声に驚いたのか空は少し戸惑ったがすぐに話し出した。

「すまん、今日燈也が言ってた事を私なり考えたんだ。それでやはり私の親友であるあいつらにはしっかり本当の私を見ておいてほしいと思っただ。だからあいつらだけに来てもらうように言ってるか？」

「分かったよ…空が決めたなら俺はそれを手伝ってやるよ。」

「フツ…馬鹿たれ…」

「馬鹿で結構。津出、灯糸、深澄でいいんだよな？つか内藤はどうする？」

「そいつらだ。内藤はどちらでも良いぞ。」

「内藤が可哀想じゃねーか。」

「あいつは打たれ強いから大丈夫だ。」

「ブツ、それ理由になってないって」

「フフ…そうだったか？」

空はやっと調子を戻してきたみたいだった。

「空…」

「ん？なんだ？」

「さっきの空の言葉だけだな、『見ておいてもらっ』じゃない『これからも見続けてもらっ』んだからな？」

「フム…そうだな…君とはこれからずっと一緒にいて、見続けてもらわなければな…夜遅くにすまなかった。」

「気にすんなって。じゃあ、おやすみ」

「燈也、愛しているぞ。おやすみ。」

「そっ、空っ！」

ツーツー

俺の声に答えてくれたのは空の声ではなく、無機質な携帯の電子音だった。

いきなり愛しているとかわれた俺の頭は熱が出たように火照り始めた。

未だに空の突拍子な行動には慣れない。

正直、これから一生慣れない気がするの俺だけだろうか。

その後俺は携帯を開き、津出と灯糸そして深澄にメールを送った。

内藤は送らないでもどうせ暇人だし、津出がほぼ強制的に連れて行くから当日話せば大丈夫だろう。

遅くなったがここで空の親友達の説明をしておこうと思う。

「津出 ^{リョウカ} 涼華」

空と一番と言ってもいいくらいの仲良しで内藤の彼女。

顔は正直とても美人だが、口がめちゃくちゃ悪い。しかし、一応根は良い奴だ。

津出は空と同じくらい戦闘能力が高い。

「灯系 美咲」
ヒイト ミサキ

熱血バカだからかなり暑苦しい。だからこそか一番友達に気をかける。(だがやっぱり気のかけ方も暑苦しい。)

運動神経は抜群だから帰宅部なのに何かと助っ人として呼ばれる。

「深澄 詩依」
ミズミ シイ

本当に高校生かと思うほど幼い姿で子供っぽい格好をすれば案外小学生でも通るかもしれない。姿と同じように思考や行動もかなり子供っぽい。

しかし、いつの間にか人の弱みなどを握っていたりする辺り単なる幼児ではない奴だ。

「内藤 陽一」
ナイトウ ヨウイチ

さつきも言ったが、津出の彼氏。どのようにして津出を落としたのかは知らないが、多分こいつが持つ優しさだと思う。

もっぱらいじられキャラで俺達から結構敵しくいじられてる。

俺にも男友達は普通にいるが、それでも内藤とは一番気が合う。

空の親友達(他のクラスメートも)は空が入院してから俺にすぐに空の病状など色々な事を聞いてきた。

俺は俺も詳しく知らされていない事を答えといた。そして、その後に津出や灯系、深澄、内藤にこっそりと空が今の自分自身の状況を知られたくないと言っている事を告げた。そしたら空の性格が分かっているのかそいつらもそれ以上俺に聞いてくる事はなかった。

俺が津出と深澄からすぐに返信が着た。俺は明日空のお見舞いに行けるかどうか聞いた。

もちろん2人共一緒に行くとの事だった。2人の返信から数分後に灯系からも返信が着た。同じ事を灯系に確認すると灯系ももちろん行くとの事だった。

俺は勉強を済ますとさっさとベッドに横になった。

『燈也…』

俺の夢の中で空が微笑んみながら立っていた。

「空!!」

俺が伸ばした手の先に空はいなかった。

【第八話ゝ思い、想いゝ】（後書き）

まず自分の中では11月に投稿したかったのですが12月になって
しまいごめんなさい

今回も読んでいただきありがとうございます

今回の話は空、燈也の親友の友人達の名前が出てきます
次話からしっかり出てくるので楽しみに待っていて下さい

【第九話〱肩に置かれた手〱】（前書き）

遅くなりましたが第九話投稿です

そして10回目の投稿なのであのコーナーが：

本編も後書きも楽しんで下さい

【第九話　肩に置かれた手】

「じゃあ行くぞ。」

俺は津出、灯糸、深澄とやっぱり暇だった内藤と一緒に空のお見舞いに行く事になった。

「俺はチャリだけどお前らどうすんの？」

「私も自転車だああ！！」

「じゃあ私、ひーちゃんのうーしろっ！もちろんりょーかはないとーの後ろよねっ？」

深澄は小さい体をピョンピョン跳ねながら、高めの声で騒いでいた。

「な、内藤しか空いてないから乗るんだからね！」

「照れちゃってかあわいー」

「詩依！からかうんじゃないのっ！」

「あははー」

俺は漫才のような会話を聞き流しながら自転車を駐輪場から引っぱり出した。

「ほれ、準備できたか？」

俺が自転車に跨って声をかけると、内藤の自転車の後ろに乗って顔を真っ赤にしながらも内藤をしっかりと握る津出と灯糸のマウンテンバイクの後ろに乗……

……れない深澄がいた。

「ひーちゃんっどうやってその後ろ乗るのよー」

「その出っ張りに足をかけるんだああ！！」

「いーやだ。むーり。足疲れーる。」

（……ガキかよ……）

深澄の文句でなかなか出発できないと、深澄がいきなり

「じゃあくどーの後ろ乗るー」と言って俺の自転車の後ろにちょくと座ってきた。

「しゅっぱーっ！」

「おううー！！」

「よっこらっしょっと。」

深澄の合図で灯系と内藤が走り出した。

場所をしつかり分かっているのは俺だけなので、俺も急いで自転車をこぎ始めた。

少し余裕ができたので、俺に掴まっている深澄に聞いた。

「で、なぜ深澄が俺の後ろ？」

「ひーちゃんの自転車は乗れないしーないとーはりょーかの物だしーだから余り物のくどー！」

「俺は余り物ですか……」

「いいじゃーん。サービスしてあげるからー」

深澄はそう言うといきなり俺を強く抱きしめて、あまりない胸を押し付けてきた。

そうすると俺の背中にしいの少しだけ……いや、ほとんどない物の感触が……

「ねえ？今カチンときたんだけど？」

「それは気のせいだ……そっそれより、ばっ、ばっ！深澄っ、やめろっ！」

「あははーくどーの顔真っ赤っかーそらちゃんに言っちゃおー」

一瞬で俺の脳裏に空の怒っている冷たい笑みが浮かんだ。

「ソレダケハ勘弁シテ下サイ……」

「あははー片言だあー」

「お前いい加減にしないと落とすぞ？」

「きゃーくどーがいじめるーこれもそらちゃんに言っちゃおー」

俺緊急脳内しゅみれーしょん

「ほう、燈也は私の親友の詩依に卑猥な行為をしたのか」

「してませんっ！」

「詩依は胸を揉まれ、さらに用済みになると自転車から落とされそうになったと言っているが？」

「断じてしてませんっ！」

「告白しときながら浮気か。覚悟はできてるな？」

こうなる可能性大だ……って言うか深澄の性格からしてこれ以上の事を空に吹き込む可能性がある……

……こいつはかなりやばいぜ

あれ？……俺死ぬんじゃね？……

俺緊急脳内しゅみれーしょん終了

「深澄……それは冗談にならんて……」

「言わないってーそらちゃん怖いもんねーそれより場所分かってないひーちゃんがどんどん先行ってるけどいいの？」

「あゝっ」

深澄に言われて気付いたが、場所が分からないのに前を走る灯系はどんどん先に進んでいた。

斜め後ろを走る内藤はしっかり付いてきていた。

内藤の影になって津出の様子は見えないが、多分顔を真っ赤に染めているだろう。

「おいっ、陽一！ちよつと灯系捕まえるから先行くからなっ！」

内藤の返事を聞かずに俺は前方で何やら叫びながら爆走する灯系に追い付くために、さらに必死にペダルをこぎ始めた。

俺の真後ろに座っている奴は呑気なもんで

「わぁーはやぁーい」や

「すごい、すごぉーい」などの声がずっと聞こえていた。

ふと、俺はこんな風に空を自転車の後ろに乗せ走りたいと思った。
多分空の事だから深澄みたいにこんなに喋りはしないだろう。
それでもきつと居心地は最高だろう。

上り坂も苦にならないに違いない。

俺は空が治ったら2人でどっか空の行きたい所に連れてってやろう
と思った。

「灯糸待てやゝー!」

「あははー早い、はやあーい」

【第九話 肩に置かれた手】（後書き）

（・A、）「どーも」「川。-。」

（・A、）「今回もお読みいただき」

川。-。」「ありがとうございます」

今日は本編にやっと登場した私の友人達が参加です」

ツン「津出ことツンです」

ブーン「内藤ことブーンですお」

ヒート「灯糸ことヒートだああ」

しい「深澄ことしいですっ」

作者「質問は今のとこ特にないので勝手に話してして下さい」

（・A、）「はい」

川。-。」「この馬鹿作者」

ツン「じゃあ何しましょ」

ブーン「話を振らないでくれお…」

ヒート「出れただけでもおkだああ」

しい「だよー」

川。-。」「極秘情報によるとこれから出番が徐々に減っていくみたいだぞ」

友人一同「なんだってー!？」

ツン「作者」

ブーン「ちよいと」

ブーン「ここにいい」

しい「来てね」

川。-。」「さあ何だかんだ言って馬鹿騒ぎしていたらそろそろ時間だ」

ツン「あら、もう?」

ブーン「もっと出たかったお」

ヒート「いやだぁぁ」

しい「ここで私から一言

私とヒートは彼氏募集中ですから立候補する方はこちらまで」

（「A」）「じゃなくてこんな座談会をしてほしいなどの要望はお手数ですがメッセージを下さい

作者が泣いて喜びます

後本当だったら友人皆の絵文字もあるのですが、使用できないみたいので了承下さい」

一同「お読みいただきありがとうございます
では次話までバイバーイ」

【第十話　温かい一時】（前書き）

遅くなつてしまい申し訳ありません

良ければお読み下さい

【第十話　温かい一時】

コンコンッ

ドアをノックする音が俺”達”が来た事を空に知らせる。

「あゝ俺。」

「燈也か。どうぞ。」

俺がドアを開けると同時に津出、灯糸、深澄が病室になだれ込む。

「空っ、おはよっ!」

「見舞いに来たぞおおお!!」

「そらちゃん、来たよー」

空はみんなの顔を見ると、すぐに笑顔になった。

(それでもあまり表情が変化したようには見えないが…)

「涼華、美咲、詩依来てくれたのか…ありがとう…」

「あのゝ俺もいるんだけど…」

俺の隣から急に内藤の声が聞こえた。

(忘れてた…)

「あつ…内藤もいたのか、ありがとう。それよりみんなに話したい事がある。そこら辺の椅子に座ってくれ。」

「それよりって……」

内藤は何かしらぶつぶつ言いながら、手近にあったパイプ椅子に腰を下ろした。俺も座ろうとしてしていると空が俺を呼び寄せた。

「燈也はこっちに来てくれ。」

「ん? ああ……」

俺は結局空のベッドの端に座った。

「あのな…」

空がみんなを見回し、一つ笑顔を浮かべた。

「私は燈也と付き合う事になった。」

「いきなり何を…」

俺が続けようとした言葉を急に遮ったのは空の柔らかい唇だった。

「えっ!？」

「ええええ!!」

「えゝ？」

「俺ダケイツモ対応ヒドイヨナ…ブツブツ…」

俺は一瞬何が起こったのか理解できなかったが、すぐに唇から空の温もりが伝わってくるのが実感できた。そしてその温もりはどんな俺の全身へと広がっていった。

離れようとしても、空がしつかり俺に手を回しているので動けない。どこを見ればいいか分からない俺の目は空の綺麗なまつげをとりあえず見つめていた。

多分数秒後に空が離してくれた、しかし俺の中での時間はとてつもなく長かった。

「そ、そ、そ、空何やってんだよ!？」

「キスだが？嫌だったか？」

「そ、そゝじゃなくてっ!!」俺はそう言いながらみんなの方を指差した。俺の指の先には当然津出、灯糸、深澄そして内藤が呆然と椅子に座って、俺達2人を見つめていた。

「空ゝとりあえず詳しく聞かせなさいよゝ」

津出が不思議そうな顔で空に尋ねた。灯糸はなぜか顔を真っ赤にしながら硬直している。深澄はまだ状況を分かっていないような顔で俺と空の顔を見比べている。そして、内藤は我関せずとあくびをしていた。

「うむ、もう一度言う事になるが、私は燈也と付き合う事になった。ちなみに今のが私のファーストキスだ。みんなにも私達が付き合い始めた事を知っておいてほしかった。以上だ。」

そんな空のことばに苦い顔をしながら津出が呟いた。

「そ、そうなの…まあいいんじゃない？」

「フフ…ありがとう。」

「ハイハイ、質問ー」

深澄が勢いよく手を上げた。

「はい、詩依君どうぞ。」

空が教師の様に右手を深澄に向けて出し、質問を促した。

それに答えるように深澄はなぜか立ち上がり空に聞き始めた。

「質問は3つあります。」

1つ目はくどー君のどこがいいのか？2つ目はどちらから告白したのか？後、告白の場所。3つ目は空先生は浮気は許しますか？

私の質問は以上です。」

なぜか空もノリノリで答え始めた。

「よろしいまずは1つ目の質問だが燈也のどこがいいのか……うーむ、上手く言えないが顔とかではなく、燈也が持つ優しい心だな……」

空が自分でウンウンと頷きながら答えた。

「俺も一度くらい言われてみたいなあ……」

内藤の小さく呟いた言葉は静かな病室で大きく響いた。

「私の大好きな内藤くーん、ちょっと後でいいかなあ……？」

満面の笑みを浮かべた津出が内藤に話しかけた。

「ハッ、ハイッ！ーお、俺はな、な、何も言ってますぞっ！ー」

語尾がおかしくなっている内藤は顔がどんどん真っ青に変わり始めていた。

（多分内藤は死んだな……）

「先生、次の質問よろしくお願いします。」

深澄が津出と内藤など気にしていないかのように質問の答えをさらに促す。

「そうだな、では2つ目の質問だが告白したのはあれはどちらからなんだ？」

空が急にこつちを向いた。

「あの……もうこの話やめない？」

俺はこれ以上空に話すのを止めさせようとする。しかし俺の願いは「だが断る。」と、さも当前のように却下された。

結局、津出、灯糸、深澄に散々冷やかされている俺をしり目に空は

2つ目の質問にもしっかりと答えた。

しかし、空は空の余命が半年ほどという事は言わなかったし、俺の空への言葉の肝心な部分は曖昧に燈也の告白って言葉で片付けていた。

「そして最後の質問だが、もちろん私は嫌だが、燈也がその人を選ぶならそれはそれでしょうがないと思う。

詩依君これでいいかな？」

「はいっありがとうございます。浮気おっけえだってよ、良かったね？」

深澄がこちらを向きウィンクをしてきた。

「あああ！！深澄い誤解を招くような言い方すんな！！！！！！」

時既に遅し、俺の叫びは意味をなさなかった。

「燈也：詩依の言葉はどういう意味なのかな？」

「だから何もしてないって！！」

「詩依どうなんだ？」

「さあーねー」

深澄がニヤニヤしながら答えた。

「ニヤニヤしながら言うなっ！！誤解を解け！！」

「と~~~~や〜」

それから俺達はみんなでふざけ合い、ここが病室だと忘れてしまうほど笑い合った。

その時は今この場所は薬品臭い、無機質的な病室ではなく、学校の教室や友達の部屋のように温かい、優しい、大切な場所となっていた。

ちなみに騒ぎ過ぎたのか途中で看護師の人に怒られた。

面会終了時間が迫り、俺達は誰からともなく静かに立ち上がった。

「空、また来るわねっ！」

「ぜひ来てくれ。」

「お大事にいいい!!」

「ああ、ありがとう。」

「そらー早く治すんだよー」

「早く治すさ。」

「じゃあまた来るな。」

「内藤はもう来なくていい。」

「ヒデエ……」

「嘘だ。」

「また来なさい。」

「はい。」

俺はドアノブに手をかけ、空に話しかけた。

「空……じゃあな……」

「燈也、いつもありがとう。そして今日はごめん。」

「何が？」

「今日言えなかった……」

「気にすんな。まだまだ時間はある。空が言いたい時に言ってやれ。」

俺はそう言つと空の方へと近付き、頭をくしゃくしゃと撫でた。

「んっ。」

空は少し首を縮め、目をギュツと閉じ、俺のされるがままにしていた。

「なあ、燈也。」

空が俺を見上げながら呟いた。

「ん？」

「ちよつと耳を貸せ。」

「ああ。」

空の口元に耳を近づけた瞬間、空の両手が俺の両頬を掴み、空と向

き合つようになつた。

「えっ!？」

空と俺の唇が触れているのか触れていないのか分からなかった。しかし、確かに空は俺に触れていた

「気持ちを抑えられなかった。ありがとな、じゃあな。」

「お、おう。じゃあな。」

空の病室のドアを出た俺を待っていたのはニヤニヤしている津出、灯系、深澄、内藤、空のお母さん、そして2人の看護師さんだった。

「えっ!?!なんでっ!?!」

「あゝもおゝいちゃいちゃしてゝ」

津出が溜め息まじりに呟いた。

「俺もしたい…!」

「私もだあああ!！」

「私もー」

津出の言葉につられ、内藤、灯系、深澄が俺をからかいだした。

「さあゝて、仕事、仕事。あつ、あんまり病院でいちゃつかないで下さいねゝ」

「あゝ私も彼氏ほしゝ」

「今度合コンでもしよゝ」

そう言つて看護師の人達は笑いながら仕事に戻つていった。

「燈也君、あんな娘だけどこれからも末永くお願いします。」

空のお母さんが空とそっくりな笑顔を浮かべながら、俺に言つてくれた。

空のお母さんにも今の事を見られていたかと思うと俺はとても恥ずかしくなり、顔を合わせる事も出来ず、必死にペコペコと何度も頭を下げて謝つた。

「いえいえ、自分こそ未熟者ですが、よろしく願ひします。それに…」

「気にしないでいいのよ。それに燈也君なら安心できるしね。」

そんな事を言われていた俺は

「早く帰ろ〜」とみんなに呼ばれた。

俺はおばさんに帰る旨を告げもう一度頭を深く下げてからみんなと一緒に帰宅した。

この時の俺は何て馬鹿だったのだろう……

空が元気でいたのは俺に、友人に、家族に心配をかけないためなのに……

それなのに……

それなのに……

何が彼氏だ……

空は1人きりで暗い、冷え切った病室で痛みを耐えていたのに……

【第十話　温かい一時】（後書き）

まず、遅くなりましたが明けましておめでとうございます
本年も作者共々宜しく願います

そして、投稿が遅くなってしまい、読者の皆さんには色々ご迷惑
をお掛けしました

ごめんなさい

これからちゃんとペースを戻し、執筆作業をさらに頑張ってい
たいと思います

今回はキャラクターが生き生きと描く事が目標だったので、それが
伝わればとても嬉しいです

多分あまりないかもしれない友人達の絡みを出来る限り書きました

今更ですが、やっぱり文章の雰囲気が変わっちゃってますね…

まだまだ自分の中で多分確立しきれてないんでしょうね…

早く自分の文章が確立出来るようにしたいです…

今回お読みいただきありがとうございます

では、また次回にお会いしましょうー

【第十一話く触れる優しさ】（前書き）

十一話を投稿します

良かったら読んでいって下さい

【第十一話　触れる優しさ】

みんなと一緒に見舞いに行ってから俺は変わらず毎日、空の所へ行っていた。

みんなもほぼ毎日来てくれていた。それでもみんなも用事がある訳で全員ちゃんと揃う日はなかなかなかった。

それに誰かが来ても俺らに気を使ってくれるのか、何かを買いに行ったりして病室にはいつの間にか2人きりになっている事もしょっちゅうだった。

今日は誰も都合が合わず、病室には俺と空の2人つきりだった。

「燈也…」

急に空が呟いた。

「ん？なんだ？」

「今度の日曜日開いてるか？」

「ほぼ毎日暇だぞ。」

「フフ…そうか。なら都合が良い。まあ、とりあえず約束だ、今度の日曜日朝一番に來い。」

「いいな？拒否権は認めない。」

「強制かよ…」

「毎日暇だと言ったのは君だが？」

「へいへい、次の日曜だな。」

空のいきなりの約束に戸惑いながらも俺は了承した。

先程から意味もなく流れているテレビには俺達と2、3歳しか変わらない新人の女優が元気に笑顔を振り撒いていた。

（何で…何で空なんだ…）

そんな事を考えていた俺の口からは気づかぬうちにため息が漏れていた。

「燈也…溜め息をつくのは駄目だぞ。溜め息をすると幸せが一つ逃げるんだ。」

空は微笑みを浮かべながら教えてくれた。

「そうなのか…これからは気をつけるよ。」

「分かったならよい…燈也、それよりキスをしないか？」

「キ、キグゲホッゲホッ」

空のいきなりの発言に俺は思いつきりむせてしまった。空はそんな俺を不思議そうな顔で見つめていた。

「い、いきなり言うなっ！！」

空のこんな突拍子もない発言には今までずっといたがまだ慣れない。多分一生慣れる事はないだろう。

「嫌だったか？」

小首を傾げながら空は呟いた。

（嫌な訳あるか…つかその顔は反則だ…）

俺を見つめる空の瞳は少し潤んでいた。

当たり前だが嫌なはずがない。もし自分の好きな相手から

「キスをしよう。」と言われて

「嫌だ。」と思う奴がいたら、俺がぶっ飛ばしてやる。

「べ、別に嫌な訳ねーよ。」

俺はそっぽを向きながら呟いた。

「良かった…」

そっぽを向きながらも空の顔をこっそり見ると瞳が爛々と輝いていた。そして空は俺の視線に気が付いたのかその目をそっと閉じた。

俺はぎこちない動きで空に近づき、空の唇に俺の唇を重ねた。

俺にはこの時数秒が何時間にも感じた。

キスを始めてからのくらい経ったかは分からないがいきなり

「はいはい、冷河ちゃん失礼しますよ」と看護師が言いながらドアを開けてきたのだが、あまりに突然の事で俺は反応する事が出来なかった。

俺達を見た看護師は

「なや！？ごゆっくり」と言いながらドアを閉めて戻って行って

しまった。

俺はもう遅いがその時になって慌てて唇を離した。

「燈也…温かったぞ…ありがとう…」

「お、俺も…」

多分あの時看護師が入って来なかったら俺はずっとしていただろう。

俺は何もかもを忘れてあの空間の中にいたかった。

そうすれば空の病気は進行しない…

変わるなら俺が変わりたい…

空が健康になるなら、俺はこの身を捨てたっていい…

俺は無力だな…

「…う…、……や、燈也!!」

「んわっ!? な、な、何だ!？」

俺が空が呼ぶ声で現実に戻った時、空は互いの鼻先がくつつくほど俺の近くまで迫っていた。

そして、再び……

「大丈夫だ、燈也…私は君が拒否しない限りずっとずっと君の隣にいる。だから、大丈夫だ。」

空がいつもの笑顔で呟く。俺の心は全て見透かされているような話し方だった。いや、実際見透かされていただろう。

俺は何をやってたんだ…

一番辛いのは空なのに…

自分が辛いふりをしているだけじゃないか…

「ごめん……」

謝る俺に空は再び微笑んでくれた。

それは他の人が見たら本当に小さな微笑かもしれない。しかし、気持ちあまり表情に出さない空にとっては満面の笑みなんだろう。

「気にするな。君は…燈也は優しくすぎるんだ。」

「ありがとう…空、ありがとう…あと、ごめん…」

「フツ、もういい気にするな。次にこの事に関して君が謝罪をするならば、次は私の久しぶりの運動の相手になってもらうからな。それよりそろそろ時間だな…今日もありがとう。」

俺は時計を確認し、立ち上がった。

「分かったよ。そうだな…じゃあな。」

俺は空に手を振り、病室を後にした。

俺がナースステーションの前を歩いていると、急にやって来た看護師の人達に捕まった。

「久遠く〜ん、どう言う事かなあ〜？」

「おね〜さん達に聞かしてもらおうかな？」

「病院内でのキスはほどほどにもらいたいんだけど〜？」

「あ…いや、すいません…」

「妬けちゃうなあ〜」

「おね〜さんに彼氏いないからって見せ付けないでほしいな〜」

「本当にだめだからね〜」

それから看護師の人達は俺を説教し終わると仕事に戻っていった。

「はあ…」俺はさっき空に言われたのに気づかぬうちにため息をしていた。

「幸せが逃げるか……」

先程空が教えてくれた言葉を思い出し、俺は1人ぽつりと口に出してみた。

俺の幸せはもう逃げてしまったのか……

俺の幸せは空との未来だ。

（もし……）

一瞬最悪の事態が俺の脳裏に浮かんた。

「いや……」

俺は頭を振り、そんな考えを捨てる。

「俺は何を考えてんだ……はあ……あつため息しちゃった……」

やはり俺のため息をする癖は治りそうもないみたいだ。

【第十一話「触れる優しさ」】（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます

読んでいただいたので分かると思いますが、今回の話は次話にしっかりと続いています

次話では何が起こるんでしょうーねw

日々、綺麗な文章が書く事が出来るよう頑張っているのですが…やっぱりまだまだですね…

次話でも燈也と空には思いっきりいちゃいちゃしてもらおうと思っています

これからも宜しくお願いします
でわでわ

失礼しまーす

【第十二話／吹き抜ける潮風／】（前書き）

遅くなりました

今回の話は自分自身も気に入ってる作品です
どうぞお楽しみ下さい

【第十二話　吹き抜ける潮風】

空との約束の日曜日

俺は前日に空に言われていた通りに空の病室に向かっていた。空が入院している階で、俺は今日も仲の良い看護師に絡まれた。

「あらゝ久遠くゝん。」

「こんにちは。」

「今日はあんまり無理させちゃだめだからねゝじゃねゝ」

「え？あつ、はい……」

何が言いたいのか俺が理解する前に看護師はさっさと行ってしまった。俺はとりあえず空の病室へと急いだ。

コンッコンッ

「入るぞゝ」

俺はいつものようにドアを叩き、空の病室に入った。

そこには、無機質的な病院の服ではなく、私服を着ている空が笑顔で俺を待っていた。その横には、柔らかい微笑みを浮かべた空のお母さんもいた。

「え！？」

「フッフッ燈也、驚いたか？外出許可が出たんだぞ。」

「は、はい？」

「燈也君、急にごめんね。」

外出許可が出てね、そしたら空が燈也君とどこか行きたいって言うから、燈也君にお願いしようと思ったんだけど……

空から聞いてなかった？

「い……や……全く聞いてないです……」

「空、ちゃんと言つときなさいって言つたじゃない。」

おばさんは空の方に目をやった。

「燈也の驚いた顔が見たくてな。」

「はあ…燈也君、本当に急だけど大丈夫？」

「いや…大丈夫ですけど…」

俺が頭をポリポリとかきながら答えると、おばさんは

「じゃあ宜しくね。何かあったら連絡ちょうだいね。

楽しんできてね。」と言つて病室を出て行つてしまった。

「フフ…驚いたか？」

俺の心でも読んだのか、空は短かくなつてしまった前髪を赤いピンで止めながら話しかけてきた。

（短い髪も似合うなあ……）

窓から薄い陽光が指している

微かな薬品の匂いが俺の鼻孔を刺激する

明け方の冷気がまだ残っている

空から漂う空の柔らかい香り

空が立ち上がりカーテンを開けた

「さあ、どこか行こう。」

今日空とデートに行くなんて全く予想していなかった俺は行き先など決められる訳がなかった。

「俺どこ行くかなんて決められないぞ？」

「大丈夫、私がしっかり調べておいたから完璧だ。」

「本当かよ……」

まずは自転車を出せと言う空の指示に従い、俺は自転車置き場から自転車を引っ張り出してきた。

「乗っていか？」

俺が自転車に跨ると空は遠慮がちに聞いてきた。

「お姫様どうぞ、お乗り下さい。」

「フフ…なら今日はそのお姫様のわがままをしっかり聞いてもらうからな。」

「あつやつぱりなし…」

俺のそんな言葉を見無視して自転車の後ろに横向にゆっくりと腰を下ろした。

「でっ、まずはどこに行くんだ？」

「どこに行こう…」

2人の間に沈黙が流れた。

「空……やっぱ決めてなかったのかよ…」

「燈也といられるなら、私はどこでもいいんだ。」

空は腕を俺の腰に回しながら顔をギョツと俺の背中に押し付けて言うてきた。

（反則だ…怒るに怒れないじゃないか……）

「そつだ、燈也、海行こう。」

「却下。」

俺があまりにも早く答えたためか空はすぐには言葉を返してこなかった。

まず病人を泳がせる事なんて出来ない。

それに近くの海まで自転車ですぐだけかかるか分からない。

「何でだ？」

「頬を膨らますな、可愛いすぎる。」

「出発だ。」

「駄目だ。」

「砂浜に座ってるだけにするから良いだろ？今年はまだ海見れてないんだ。」

空の切なそうな目を見ると強く却下出来なくなってきた。

「…本当に入らないか？」

「ああ。」

「仕方ねーな。ちゃんと捕まってるよ。」
俺はゆつくりとペダルをこぎ始めた。

「なあ…燈也…」

「ん？」

「このままどこか誰も知らないところに行かないか？」

「ばーか、何言ってるんだ。ほら、これから坂だからしっかり握んどけよ。」

「分かった…」

後ろから聞こえる空の声は心ここにあらずと言った様子だった。

俺は腰に軽く回された手を片手でちゃんと回すようにして、坂を上がり始めた。

「ゼハア、ゼハア…よしっこつからは下り坂だ…」

「燈也…死にそうだが大丈夫か？」

「空が重すぎたみたいだ。」

「私に喧嘩を売るとはなかなか良い度胸だな。」

「グヘアッ!!」

俺の軽口に対し、空は俺の腰を回していた両手を思いっきり締め上げた。

空の体重が重いなんてある訳ない……

この間乗せた小柄な詩依より全然軽い……

きつと、健康な時に乗せても軽く感じていただろうが……

けど…今は…

「まだなのか？」

後ろから高めの空の声が俺の耳をくすぐる。

「あ…後15分くらいで着く…はず…」

全身を汗だくにしながらも俺はペダルを漕ぎ続けていた。

「あつ見えてきたぞ。」

「おお」

角を曲がると、目の前に青く澄んだ海が広がってきた。浜から吹いてくる潮の香りを含んだ風がそつと俺達を包んでいった。

「フフ：潮の香りがするな。」

「目の前だしな。」

俺はそう言うつとペダルを漕ぐ力を少し強めた。

季節外れの海には海水浴客がいる訳もなく、当然客もないのだから海の家も開いていない。

ちらほら見える人影は優雅とは程遠いサーファー達が波と格闘している姿だった。

「燈也、早くしろ」

俺が自転車を停めるのに戸惑っているのを尻目に砂浜をどんどん歩いて行つた。

「入るなよ」

「おー」

俺が目の前にあつた自動販売機で水を買つて、温かいと言うより熱い砂浜へ腰を下ろした時、空は波が届くか届かない微妙な場所を歩き回っていた。

「おい、燈也も来いよ」

「す、少し休憩させてくれ…」

「仕方ないな」

そう空は笑顔でそう答えると、少し屈みながら手を伸ばして履いていたサンダルを脱ぎ、両手で持ちながら長めのスカートかワンピースかは分からないがその裾を少しだけ持ち上げ、足首くらいまで海の中へ軽く入って行ってしまった。

「おい、入るなって言つたじゃねーかよ。」

「もう入ってしまった。」

俺の言葉に対し空はにこやかに答えた。そこには反省の色など全く見えない。

「燈也、まだか」

「はあ…今、行くよ。」

少し落ち着いた俺は靴をその場で脱ぎ、その中に靴下を突っ込んでジーンズの裾を数回折ってから空の方へと走って行った。

「うおっ！冷てっ！」

俺の足下の砂を波がさらってゆく。

「待ってたぞ。」

そう言いながら空は俺の方へ向き直った。

「空……」

潮風が空の髪とスカートを少しなびかせながら、空は舞い散る波の飛沫の中心に立っていた。

余りにも綺麗な光景に俺は心から見とれてしまった。

そこに立つ空の姿は今すぐにでも走って近付き、思いつ切り抱き締めて、空の全てを俺の物にしたいほど綺麗だった。

空が水飛沫を俺に向けて飛ばしたのも気付かない程に俺は空の姿をぼんやりと追っていた。

「うわっ！おい！空っ！」

「えいつ」

空はもう一度波を蹴り、飛沫を舞い散らせようとした。しかし、それは潮風によって結局俺の方へ飛ぶことはなく空自身にかかってしまった。

「うわっ…」

空はフフ、と笑い始めた。そんな空を見て俺は膝に手を付くほど笑ってしまっていた。

「ばあーか。」

「馬鹿とはなんだ。」

「本当の事じゃねーか。」

秋の海はやっぱり冷たかった。

けれどおかしな太陽のおかげか、空が近くにいてくれたおかげか俺

には冷たさは全くと言っていい程感じなかった。

「そろそろ帰るか？」

「後少し……」

俺達は熱が残る砂浜に腰を下ろしていた。空はその頭を俺の肩に預けていた。

沖から吹いてくる風は俺の髪をワックスの上からさらにガチガチに固めていた。それなのに空の髪は吹く風に逆らわずにさらさらと揺れていた。

「燈也…好きだぞ…」

「いきなり何言ってんだよっ！」

空は俺の言葉を鼻で笑いスツと立ち上がった。

「さあ、帰ろうか。」

空はスカートに付いた砂を手で払いながら、俺を見下ろしていた。

「ああ、そうだな。」

俺も立ち上がると、伸びを一回して、砂を払ってからゆっくりと歩き始めた。

「とっつ」

空はいきなり走ってきたかと俺の持っていた水のペットボトルを奪った。そしておもむろにふたを開け、ゴクッゴクッとのどを鳴らしながら飲み干してしまった。

「間接キスだな。」

「あ、あ、あほっ！もう行くぞっ！」

俺は顔が赤くなるのを感じながらも自転車の置いてある場所に向かって歩いていった。

「よし、出発すんぞ。いいな？」

「おう。あ、待て。」

「ん、どした？」

何かと振り向いた俺の唇に空はいきなり自分の唇を重ねた。

「バ、バカッ！！いきなり何すんだ！？」

「フフッ…燃料だ、燃料。」

「ハア…もう、行くぞっ」

「ため息は幸せが逃げると言ってるだろう。」

「原因は空だろう！！」

「うるさい。早く出発しろ。」

俺の言葉を空は微笑みながら一蹴した。

空という事が出来る忘れないこの一瞬

はつきりとした空の温もり

眩しい夕日

波の感覚

潮風が俺達2人を包み

そして

吹き抜けて行く

【第十二話、吹き抜ける潮風】（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます

前書きにも書きましたが今までの『Cool Sky』の中でも気に入ってる話です

生き生きとした2人表現できたか分かりませんが、読んでいただいた皆さんに少しでも2人の雰囲気伝われば良いなと思います

これからも宜しくお願いします

【第十三話〈幼き笑顔〉】（前書き）

第十三話を投稿します

今作は新しいキャラが登場します

どうぞ読んでいって下さい

【第十三話　幼き笑顔】

「あはは」

病室から幼い笑い声が聞こえたため、俺はノックしようとしていた手を止め、病室の名札を確認した。しかしそこにはしっかりと俺の幼なじみ、そして俺の彼女の名前である「冷河 空」という文字がしっかりと書かれていた。

俺は一呼吸置いてから、二度ドアをノックした。

病室からは空の柔らかな声が返ってきた。

「はい。」

「あ、俺だ。入るぞ。」

「おう。」

俺が病室に入ると空と先程の声の持ち主であろう小さいお客さんがいた。

その小さいお客さんは小学校低学年、いやもう少し小さいだろう少女がちょこんとパイプ椅子の上に座って、微笑んでいた。

「何をあほ面している。早く座れ。」

「あ、ああ…空、この子は？」

俺は広げてあったパイプ椅子に腰を下ろしながら空に聞いた。

「この子はな」

空の言葉を引き継ぎ少女が自己紹介を شدした。

「僕は「岡川 鶯」^{オカガワ ツグミ}です。お兄さんは？」

その少女は髪を肩の少し上辺りで切りそろえられてた。その髪は少女が足をばたつかせる度に軽やかに揺れていた。

入ったと同時に気付いた事はその少女の服がこの病院の入院患者用の服だったという事だ。

「…お兄さん？」

少女の無垢な瞳が俺に向けられていた事に俺は気付いた。

「ああ…ごめん…えと…俺は久遠燈也。」

空のか…まあ深い知り合いなんだ。

んーと…お、岡川ちゃんは空といつ仲良くなったの？」

俺は軽く自己紹介をした後、沈黙になるのは気まずくなると思い軽く質問した。

「鵜、この馬鹿は私の彼氏だ。鵜よりガキな奴だが優しくしてあげてくれ。」

後、そんなに緊張しなくても大丈夫だぞ？」

空は緊張しているらしい岡川と名乗った少女に優しく微笑みかけた。

少女は深呼吸をすると、ゆっくりと話し始めた。

「あ、あの、僕はね…こないだ検査の順番待ってる時、空ねえと色々お話ししてもらったんです。」

それでその後ジューズもらって、それからまた少しお話しして仲良くなったの。」

「と言う事だ。で、時々勉強を教えてあげたりしてるんだよね？鵜？」

「うん。空ねえには色々優しくしてもらってるの。」

少女はピヨンと椅子から降りるとテクテクと空のベッドの端に腰を下ろした。

「よろしくね、岡川ちゃん。」

俺がそう言つと、岡川ちゃんは一度コクンと頷いた。

「うん。よろしくお願いします。」

それから三人でたくさん話をした。

主に岡川ちゃんが俺達に話しかけ、それらを俺達が聞く。そしてたまに空が俺を馬鹿にする。それを見て岡川ちゃんが笑う。

俺達はそんな柔らかい、ほのぼのとした時間を過ごしていた。

そんな時、岡川ちゃんの声が少しずつ小さくなっていった。

「どうしたの？」

「鵜、どうした？」

俺達はあからさまに元気をなくしてきている岡川ちゃんを心配した。岡川ちゃんは俺達の言葉を受け、ゆっくり顔をあげると、話し始めた。

「あ、あの…僕の事鵜って呼んで…だから…お兄さんの事……」

岡川ちゃんの声はさらに小さくなっていき、途中で言葉は途切れてしまった。しかし、頬を真っ赤にしながらも一生懸命に喋る姿はとても可愛らしかった。

俺と空は静かに岡川ちゃんの次の言葉を待った。

「あの…お兄さんの事…に、にいにつて呼んで…いいですか？」

予想外な岡川ちゃんの頼みに俺は断る気持ちなんて全くなかった。

「もちろんだよ、鵜ちゃん。」

俺がそう言った瞬間に俯いていた岡川ちゃんが顔を上げ、少し照れている様子ながらも満面の笑みを返してくれた。

「にいに。ありがとっ」

（ヤヴァイ…可愛すぎ…）

「こんな奴がお兄ちゃんの良いのか？」

鵜ちゃんを優しく見つめている空が話しかけた。

「うん！」

鵜ちゃんはそう答えると、今度は俺の方へ向かってきて、俺の膝にちょこんと座った。

それから後も先程とちつとも変わらない三人の家族のようにさえ思える温かい時間は少しずつ過ぎていった。

ふと時計を見ると、いつの間にか面会終了の時刻が近付いていた。

「あつ…そろそろ時間か…」

俺は鵜ちゃんを隣の椅子に座らせてから立ち上がると、パイプ椅子を片付け始めた。

空は鵜ちゃんに優しい微笑みを浮かべながら「鵜、そろそろ時間だから自分の部屋に帰きなさい。」と言った。

「うん。にいにと部屋帰る。」

そう言つて、椅子からパツと下りると、俺の後ろに回つて、腰辺りに抱きついてきた。

微笑みながら俺と鷗ちゃんを見つめる空の顔はあたかも母親か姉のような慈愛に満ち溢れた物になっていた。

鷗ちゃんの椅子も片付けた俺は空のベッドに近付くと、空が口を開いた。

「一緒に行けなくて悪いな。」

「気にすんな。じゃあな、空。」

「ああ。」

俺は空の頭をクシャツと撫でた。空は目を細め、俺の手の動きに任せていた。

「じゃあ、帰るぞ。」

「待て。」

そう言つと同時に空の手が俺の手首を掴む。

空は俺の顔をジーツと見つめるながら少し唇を尖らしていた。

俺は空の行動を理解し、鷗ちゃんがまだ俺の腰辺りに抱きついていて、見ていないを確認すると、一瞬だけ唇を重ねてすぐに離れた。

「フフ…ありがとな…」

「俺に拒否権ないしな。よし、鷗ちゃん帰ろ。」

「うん。」

抱きついていた手を離すと、ドアの方へ歩き出した。

「じゃあ、空ねえまた来るね。」

「空、じゃあな。」

「鷗、燈也またな。」

空の病室を出て俺は鷗ちゃんに聞いた。

「鷗ちゃん、部屋はどこなの？」

「えつとね……もう1階下の6番のお部屋。」

「6号室なのかな？…まあいいや…行こっか？」

俺は鷗ちゃんに向かつてそつと手を差し出した。

鷗ちゃんは俺の差し出した手をじつと見ていた。

「どうしたの？」

「んと…えと…」

俺の手を見ていた鷓ちゃん、の目はいつの間にか遠慮がちに俺の目を見つめていた。

「そ…その…にいに…にお、おんぶをしてほしいんで…」

俺は鷓ちゃんの頭を優しく撫でると、鷓ちゃんに背を向けしゃがみ込んだ。

「はい、どうぞ。」

「ありがとう、にいに。」

鷓ちゃんはそう呟くと俺の背中に寄りかかり、両手を俺の首のところで組んだ。

俺は鷓ちゃんの太もも辺りを手で持ち、ゆっくりと立ち上がった。

（えっ…！？）

俺は鷓ちゃんが本当に俺の背中に全体重を預けているのだろうかと思うほど軽い事に驚いた。そして、その軽さは俺に鷓ちゃんがどれほど病魔に蝕まれているのか考えさせるには十分だった。

（この小さな体でどれだけ頑張ってたんだよ……）

「にいに？」

鷓ちゃんが心配そうに尋ねてきた。

「あつごめんね。じゃあ行くよ。」

「はい。」

鷓ちゃんは顔をギュツと押し付けていたので俺が歩く度に鷓ちゃんの短い髪の毛が俺の首筋をくすぐってくる。

「鷓ちゃん、今日はお父さんとかお母さんは来なかったの？」

「んと…僕のお父さんはいないの。」

お母さんは一生懸命お仕事してるから来れないの…」

俺は言葉を無くしてしまった。いくら何でも考えなしに聞いてはいけない事だった。

「でも…」

そんな俺の考えを遮るように鷓ちゃんは呟いた。

「でも？」

「今は…お母さんが来なくても僕は寂しくはないです。」

鷓ちゃんは一呼吸置くと、ゆっくりと口を開いた。

「僕に空ねえとにいにができたから…」

鷓ちゃんはそう呟くと今まで以上に強く顔を押し付けてきた。

「鷓ちゃん…ごめんね…」

そう言った後、俺は続けた。

「鷓ちゃん、どんな時でもいいから何かあったら俺とか空にすぐ教えてね。鷓ちゃんのお母さんやお父さんの代わりはできなくても、それでも、それでも鷓ちゃんのお兄さんやお姉さんではいてあげられるから…」

俺はゆっくり言葉を選びながら鷓ちゃんへと声をかけた。俺の背中では鷓ちゃんの嗚咽が洩れていた。

それは今まで幼い鷓ちゃんの中で溜まっていた物が落ちていったようにも思えた。

「鷓ちゃん…もうちょっとゆっくり行くよ?…」

「う…う…ん…」

俺はエレベーターを使わずに少し遠回りをして、階段で下りていった。

俺の首筋を冷たい物が流れ落ちていった。

俺が鷓ちゃんを病室の前に連れて行く頃には鷓ちゃんは泣きやんでいた。

「にいに、ここでもう大丈夫です。」

「分かった。じゃあしゃがむまで待っててな。」

俺はその場でゆったりとしゃがみ、鷓ちゃんを丁寧に降ろした。鷓ちゃんは俺の前に回ると笑顔で「にいに、ありがと。僕、にいに大好きだよ。」と言って、鷓ちゃんは部屋に戻って行った。

「俺も帰るか…」

俺は伸びを一度し、深く息を吸うとと、出口へと向かった。
俺の肺は慣れてきた薬品の臭いによって満たされた。

【第十三話「幼き笑顔」】（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます

空と同じ病院に入院している鶯ちゃんの登場です

幼くて天真爛漫な鶯ちゃんの言動にこれからも注目していてあげて下さいw

自分的にはとても動かしやすいキャラですwww

これからは多分結構登場してくると思うので空、燈也同様に暖かい目で見えていただきたいと思っていますw

でわ、今回はこのくらいで…

次話以降も宜しく願います（・・・）

【第十四話「夢で会った君」】（前書き）

今回はサイドストーリー的なお話です
ぜひ気軽に読んでみて下さい

今回は15回目の話という事で後書きでは恒例のコナーを行っています

【第十四話　夢で会った君】

綺麗な満月が俺を照らしていた。

そこは見覚えのある土手だった。そして、俺の少し前に空の後ろ姿が見えていた。

『空…』

俺の声に空は振り向いてくれなかった。そして、空は俺の存在に気付かないのか、どんどんと前に進み出した。

『空！』

俺はゆっくりと空を追い始めた。しかし、全く詰まらない距離を感じ取った俺はいつの間にか走り出していた。

『そ、空！待てよ！』

必死に走って、手を伸ばしても俺の手は空の温もりに触れる事は出来なかった。

追い付こうと更に必死になった時、自分の足がもつれたのが分かった。

俺は倒れながらも空へと手を伸ばしていた。

ドシッ

「空！！」

俺の目の前には先程とは違った闇が広がっていた。すぐにそこが自分の部屋だということに気が付く。

「何だ…夢か…」

何て嫌な夢だ…まだ体全体がドクドクいつている。ベッドから落ちた時に背中を打ったのか少し息苦しい。

伸ばしていた俺の手はベッドのシーツ端を掴んでいた。

「ちっ」

俺は一度舌打ちをすると、立ち上がり、ベッドに潜り込むと、再び

眠りの中へと落ちていった。

『燈也…燈也…』

『空…か？…』

後ろからの声に反応した俺が振り返るとそこには空が一糸纏わぬ姿で立っていた。

『お、おい空っ！何てかつこ…ングッ！』

俺の言いかけた言葉は空の唇によって急に塞がれた。

ゆつくりと離れた空が頬をピンク色に染め、目線を俺から外しながら話し始めた。

『と、燈也…君になら…いや、君に…その…わ、私の全て…全てを…あ、あげてもいいぞ…』
『えっ！？』

俺は目を見張った。しかし、何かがおかしい。俺は頭の中の靄を払うために目の前の空をじっと見つめた。

『燈也…いい、嫌か？…』

空は、空はこんな風に顔を真っ赤に染めるだろうか。

空はこんなにも恥ずかしがるだろうか。

きつと

きつと

空はこんな時でも…

俺がそう感じた瞬間、俺の目には前に再び天井が映し出された。

『やつぱり夢…か？』

ボーっとしていた意識がやっと戻ってきた。今、俺は俺の部屋にいて、ベッドで横になっている。そして、空は病院のベッドにいるはずだ。

「今日は変な夢多いな…」

上半身を起こした俺は自分の下半身の膨らみに気がついた。

「あつ、や、やべえ…」

俺の頭の中に先程まで夢の中で見ていた空が鮮明に浮かんできた。
俺は頭を数回振り、記憶からぬぐい去ろうとしたが、そんなに簡単に消えるような事でもなかった。

「明日どんな顔すりゃいいんだよ……」

横になりながら、天井を見上げる。目を閉じても浮かんでくるのは空の姿だった。

「寝れね〜」

カーテンの向こうの空は少しずつ明るくなり始めていた。

俺の今日という一日はこうして色々な意味で元気で、しかし昨日の疲れがなくならないまま始まった。

【第十四話、夢で会った君】（後書き）

（・A、）「今回も」

川。-。（）「お読みいただき」

（・A、）「ありがとうございます」川。-。（）

（・A、）「今回は前の話で登場した岡川鵜ちゃんことツーちゃんが来てくれています」

川。-。（）「ツー」

ツー「はい、皆さんこんにちは！！岡川鵜ことツーです！！」

（・A、）「ツーちゃんがいると場の空気が良くなるよね」

ツー「ほんとっ！？いにいに、ありがと！！」

（*・A、）「ふひひ」

川。-。（）「ほほう、ドクオはロリコンか」

（・A、）「ちゃうわ！」

川。-。（）「私なんかよりツーちゃんの方が好みなんだな
覚えておこう」

（・・A、）「何でそうなるんだよ！」

ツー「いににが困ってるー」

あははー

川。-。（）「あはは」

（・・A、）「クー、顔が笑ってませんよ？」

川。-。（）「それよりドクオは何て夢を見ているんだ」

ツー「いににの夢に裸のお姉ちゃんが出たんでしょー？

いににえっちー」

川。-。（）「エッチー」

（・A、）「ちよつと待て！！あれは作者のせいだ……」

作者「はい、今日の座談会はこの辺りで終了です」

（#・A、）「作者……てめえ……」

ツー「次話からも僕もいっぱい出るから皆さん宜しくお願いします」

「!」

川。。(「今回もお読みいただきありがとうございます
では、次話でまた会いましょう」

(・A、)「あっ！俺の言葉！」

川。。(「せーの」

一同「ばいばい」

【第十五話〜未来への願い〜】（前書き）

第十五話を投稿します

宜しければ読んでいって下さい

【第十五話　未来への願い】

あの変な夢を見てから数日後、今日も俺は空の病室に来ていた。別に俺が何をした訳では無いが、あの日は罪悪感を感じていた。

「うーっす、入るぞ」

「どうぞ。」

俺の声への返事は今日は珍しく空1人の声だった。

「あれ？今日鷓ちゃんいないのか？」

「今日は検査と言っていた。」

そうだ、燈也、鷓ちゃんの病室で待っててやれ。」

「ああ。。じゃあ鷓ちゃんの迎えに行ってくるな。」

「燈也。」

「ん？」

俺は踏み出しかけた足を止めた。

「今日はよそよそしくないな。」

「へ？」

「ここ数日、燈也の様子がよそよそしかったから何かしたか不安だったんだ。」

俺は空から目を逸らす事が出来なかった。俺は自分自身気付かぬうちに空を不安にさせていた事にやっと今気が付いた。

「ご…めん。」

別に空は何もしてないよ。ただちよつと…」

「ん？」

「いや…その夢を見て、な…」

「夢？」

何か嫌な夢だったのか？」

俺の頭に夢での空の姿がまた浮かんできた。

「いや、ちよつと…その、へ、変な夢で…さ…」

もう空を直視する事が出来なくなつた俺は頭をかきながら、明後日

の方向を見た。そして、そんな俺をじっと見つめていた空は何か感じ取ったのかフツと笑った。

「夢の私は気持ち良かったか？」

「ゲフツゲフツ!!」

空のストレートな表現に俺は思いつ切り咳込んだ。

「ばっ馬鹿!! お前は何を言ってるんだ!!」

俺のそんな様子を見て空はキョトンとしていた。

「何だ違うのか？」

「ちっ違うわ!!」

「なら今からやるか？」

そう言つと空は俺を迎えるように両手を広げた。

「も、もうお迎えに行ってくるわ!!」

俺はそう言つて、「意気地なし」と呟いている空を無視して部屋を出ようとした。しかし、俺は足を止めた。

「なあ、空。」

俺は振り返ると空に一步近付いた。

「どうした？」

「その…心配させて悪かった。ごめん。」

「私は大丈夫だ。」

そう言つと空はニコリと笑ってくれた。

「ありがとう」

そう言つて俺は空を軽く撫でると、鷗ちゃんの元へと向かった。

「こんにちは。」

「あら、燈也君今日はお迎え？」

鷗ちゃんが俺や空の事を話し回っているため、小児科のほとんどの人は俺達の事を知っていた。

「まだ鷗ちゃんは検査のはずよ。」

「そうですか…じゃあ待ってますよ。」

トントント

いないと分かっているけど、俺は一応ノックをした。

俺は

「失礼します。」と言いながら、静かにドアを開けた。

パイプ椅子を引っ張り出して腰を下ろした。俺は静かな病室でのんびりと待っていた。

何分たっただろうか、病室のドアが開く音で俺は少し落ちかけていたまぶたを戻した。

「あつ、にいに！」

鷗ちゃんは俺だという事に気付くと、パタパタとスリッパを鳴らしながら、やって来た。

「にいに、ただいま。」

「ん、おかえり。」

俺は近寄ってきた鷗ちゃんの頭を優しく撫でた。

「じゃあ、お兄さん後はよろしくね。」

鷗ちゃんを連れてきた看護師さんはそう言つと、病室から出て行った。

「鷗ちゃん少し休む？」

「空ねえの所に行きたい。」

「よしつ、じゃあ行こうか。」

俺はそう言つて立ち上がり、パイプ椅子を元あった場所に片付けて、鷗ちゃんの小さな手を握った。

「ほらほら、このお兄さんが僕のにになんだよ。」

「どうも」

鷗ちゃんは知り合いに会う度に俺をその人に紹介する。俺の記憶ではもう俺を紹介した人にさえ鷗ちゃんは再び紹介していた。

「優しいお兄ちゃんが出来て良かったねー。」

「自慢のにいにです。」

鷗ちゃんは俺の顔を見上げた後、こっちが恥ずかしくなるくらい胸

を張って自慢をした。

鵜ちゃんの話を俺が聞いているとすぐに空の病室に到着した。
トントンッ

鵜ちゃんの小さな手がドアを叩く。

「空ねえ〜」

鵜ちゃんはそう言うと、空の返事を待たずに病室へと入っていった。

「空ねえ聞いて、聞いて。」

「鵜、どうした？」

俺は空と鵜ちゃんの会話を聞きながらドアを後ろ手に閉めた。

「今日、にいにがお迎え来てくれたんだよ。」

「そうか、それは良かったな。」

パイプ椅子を二つ取り出し、両方とも組み立てる。俺は一つに腰を下ろして、二人の会話に耳を傾けながら、少し目を閉じた。

「でねでね〜」

鵜ちゃんのまだ幼さの残る可愛い声が耳に響く。

「燈也が何かやったのか？」

空の温かい優しさのこもった声が俺を満たす。

「あ…にいに寝てる…」

「ふむ…疲れているのだろう…鵜…少しだけ静かにお話ししようか。」

「

「うん…」

俺は眠り行く意識の中で願っていた。

今この空間が病室ではなく、家で笑い合える未来が来る事を。

【第十五話　未来への願い】（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございます

今回の話は当初、前回の話と関係はなかったのですが、考えていくうちにやはり前回と関係付けてみました

前回の物語に特に深い訳はなく、思春期の燈也を書いてみました

ぜひ前話と共に楽しんで下さい

これからも燈也、空、その他のキャラクターそして作者含めてこの物語を宜しく願います

【第十六話〱秘密の予定〱】（前書き）

十六話を登校します

今回は久々に学校でのお話です
良ければ読んでいって下さい

【第十六話　秘密の予定】

「燈也」

聞き慣れた声が俺を呼び止めた。後ろを振り向くと、そこには内藤がいた。

「なんだ…陽一かよ…」

「なんだって…燈也、対応ひでえー」

「んで、用事は何？」

「あつ、そうそう。涼華が食堂で呼んでたよ。」

「分かった、行こうぜ。あ、途中で購買寄るからな」

「あいよー」

「で、津出は何の用なんだ？」

「知る訳ないじゃん！！」

内藤はわざわざその場で立ち止まると、胸を張って答えた。

「えばって言うんじゃないか！」

俺はそう言いながら、内藤の胸を軽く小突いた。

「いつてー殴るな、燈也ー」

やられた内藤は俺の背中を平手で叩いた。

「てめえー」

「燈也からやってきたんじゃないん。」

俺達はこんな風にふざけていた上、途中の購買で昼食のパンを買っていたので、食堂に着くまでに結構時間がかかってしまった。そして、その食堂には大変ご立腹の津出が座って待っていた。

近づいて分かったが津出の隣の席には灯系と深澄も座って待っていた。

「わりい。」

「涼華、ごめん。遅れた。」

「あんた達遅いつ！」

まあ、いいわ。ちょっと話があるのよ。良いわよね？」

津出は目の前のオムライスをつつきながら言ってきた。

「おう。」

「いただきます。」

俺の隣に座った内藤は早速パンの袋を開けて食べ始めた。

灯糸と深澄も話を止め、津出の話に耳を傾けていた。

「まだまだ先の話になるんだけどね、出来たら空の病室でクリスマスにパーティーをやらない？」

空の病状で無理ならしょうがないけど、みんなでいた方が空も楽しんでくれるだろうし。

あ、内藤、残り食べて。」

津出はそう言うと、内藤の方へ半分以上も残ったオムリスを差し出した。その瞬間、内藤は空腹の肉食獣に肉を与えたかのような早さでオムリスを食べ始めた。

（いつの間にパン食い終えてんだよ…）

「かなり先だな…急にどうした？」

俺はそう言うと、袋を開けてパンを一口かじった。

「いや早めに言つとかないと予定入っちゃうかもしれないでしょ？
つて言うか入れられたらこっちも言いにくくなるしね。」

…美咲と詩依はいい？」

「もちろんだあああ！！！」

「当たり前じゃんつ、りょーかつ」

それまで静かに話を聞いていた灯糸と深澄は笑顔で答えた。

俺はその時、ふと鷗ちゃんの笑顔が頭に浮かんだ。

「なあ…津出…」

「何？」

「空と俺の知り合いの子で鷗ちゃんつて子も一緒にいいか？」

「もちろんOKに決まってるじゃない。」

その答を聞いてから俺は鷗ちゃんの事をみんなに軽く話した。

俺が話し終えて少ししてから、昼休み終了を告げるチャイムが鳴っ

た。

津出は立ち上がると俺達にビツと人差し指を向けて

「って事で空と鷗ちゃんのプレゼントは用意しときなさいよ！特にその馬鹿男子2人組！分かった？」と言った。

「あいよ」

「陽と一緒にすんな！」

「あんたらは似たり寄ったりよ。」

津出はハアとため息をついてから歩き始めた。

「ばあゝか、ばあゝか。クスクス」

「ばあああかああ」

深澄と灯系もそう言ってスタスタ歩き出した。

「燈也…結局、お前も馬鹿なんだよ…」

陽一もそう言って俺の肩をポンと叩いて歩いて行った。

「てめえら……待てやー！」

誰一人として俺の言葉を聞こうとしない四人を俺は追いかけた。

内藤に追い付いた時、とりあえず頭を一度こずいとした。

すぐに津出達の溜め息が聞こえた。

「そうだ…津出、クリスマスの事空と鷗ちゃんには俺から言っておいて良いんだよね？」

「あっそうそう忘れてたわ。その事は内緒にしときなさいよっ！」

「え？あ、うん。分かった。」

「ドッキリの方が喜んでくれるはずだしねっ！」

「あいよ」

少ししてから五時間目の授業が始まった。

教師が黒板に書く言葉をノートに綴りながら俺は別の事を考えていた。

（何あげようか…）

俺の頭では色々な品々が浮かんでは消えていった。

空が一番喜ぶプレゼント
空が笑顔になるプレゼント
空が幸せを感じるプレゼント
俺は空に何をプレゼントしよう……

【第十六話「秘密の予定」】（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございます

今回は全く空が登場してきませんがこういう話もたまに自分的にもありかなと思いました

たくさん的人物を動かすのは難しいですがもっともっと積極的に登場させていきたいですね… まあこれ以上登場させる予定は”今のところ”はありませんが… w

これからも宜しく願います

【第十七話、君を待つ時間】（前書き）

遅くなりましたが、17話を投稿します

よろしければ読んでいって下さい

【第十七話　君を待つ時間】

帰りのHRが終わり、早く空の所へ行こうと俺は鞆を持って席を立った。

「あつ久遠、ちょっと待つて！」

廊下に出ようとした所を津出が引き止めた。

「ん？何？」

「今日、内藤と空のお見舞い行こうかと思ってるのよ。久遠も行くなら一緒に行かない？」

「分かった。あれ、でも内藤は？」

一緒に行くと言いつつ、姿の見えない内藤に俺は首を傾げた。

「あそこ。」

津出が指差した先には箒でゴミを集めている内藤の姿があった。

「今日、掃除の班か。」

「そーゆー事。」

ベランダにいましょ、と言う津出の提案に従い、俺達はベランダから二人で内藤をボーッと眺めていた。

「ねえ、久遠……」

俺が見つめる先では陸上部が練習を始めようとしていた。

「ん？」

津出は言おうか言わまいか少し悩んだ様子で一呼吸置いた後、おずおずと聞いてきた。

「空は本当に大丈夫なの？……」

俺は陸上部を眺めるのをやめて、ゆっくりと首を上げて空を見た。今日は所々に雲があり、太陽を隠しているのにも関わらず、とても明るい空だった。

「……空は俺と約束した。」

だから大丈夫だ、大丈夫……」

俺はその言葉が津出へ向けているのか、それとも自分自身へ向けて

いるのか自分でも分からなかった。

「なら大丈夫よね！」

「ああ……」

俺はゆっくりと視線を再び陸上部へと戻した。陸上部はスタートの合図で走り出した瞬間だった。俺はその姿をずっと目で追っていた。

「空は絶対嘘はつかないよね。」

津出の方を俺は向いて一言呟いた。

「あんましみったれた事言ってんじゃねーぞ。」

津出は俺の言葉に驚いた様子だったが、すぐにいつもの様子に戻った。

「く、久遠に言われなくても分かってるわよ！」

「なら良かった。」

俺がそう言った時、急に教室から大きな音がした。慌てて見てみると、机をいくつかひっくり返した内藤が苦笑いをしながら頭をかいている姿が映った。

「はあ……あのばか……」

隣から大きな溜め息が聞こえた。

俺の口からは自然と笑みがこぼれていた。

空、早くこっちに来いよ。みんな待ってるからな。ちゃんと待ってるからな。

【第十七話、君を待つ時間】（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございます

今回の話はちょっと短くなってしまいました
でも、次話を極力早く投稿出来るようにするので楽しみに待っていて下さい

今回はあまりない、学校内でのやり取りです
いつもと違う雰囲気を出せたら良いなと思います

でわ、これからも宜しくお願いします

【第十八話、木漏れ日の温もり】（前書き）

皆さん、こんにちは

十八話を投稿します

十七話の後編としてお読み下さい

【第十八話　木漏れ日の温もり】

「悪い、待たせた。」

内藤が掃除をやつと終えてきた。

「遅いわよ、このばかつ！」

「ばーか。」

「ば、馬鹿って言う奴が……」

内藤の言葉が途中で止まった。隣にチラリと目をやるとそこには冷めた微笑みがあつた。

「内藤くん、馬鹿って言った奴が何だつて？」

「ぬわ、ぬ、ぬわぁんでもないですよ。」

そ、それより早くお見舞い行かない？」

内藤にしては上手い話の切り返しで、俺達は当初の目的通り病院に向かう事にした。

俺は内藤と共に自転車で走っていた。津出は内藤の後ろにちょこんと座っている。今まで静かだった津出が不意に声を出した。

「あつ、内藤、止まって。」

「ぐおふつ……！」

隣で変な声が聞こえた。何が起きたのかと、内藤の方に目をやると津出が内藤の腰をギュツと抱き締めていた。

内藤は急ブレーキをかけて止まったが、俺は敢えて止まろうとはしなかった。

2人を無視して走り去ろうとした俺を後ろから声が呼び止めた。

「ちょ……！！燈也行くな……！」

「ちっ」

俺がスッとターンして内藤の方を見ると、ゾンビのように俺の方へ手を伸ばしていた。内藤の横に戻って気付いたが、自転車の後ろに津出の姿はなかった。

「さつき舌打ちしただろ！」

「あれ、津出は？」

「舌打ちしたよな！」

「津出は？」

「うつ……あそこ……」

少し半泣きになっている内藤が指差した先では小さな花屋に津出が入って行った。

「ふわぁ…燈也はいーの？」

内藤が欠伸をしながら尋ねてきた。

「ああ……」

俺の頭の中に空が入院してすぐの事が思い浮かんだ。

その時、俺は買ってきた花束を花瓶に入れていた。

「なぁ、燈也。」

「ん？」

「もうわざわざ来る度に何かしら買ってこなくても良いぞ。」

「え？」

「こんだけしょっちゅう来るのにその度に何か買ってきたらすぐに金無くなるだろ？」

「いや、大丈夫だぞ。」

「馬鹿、意地を張るな。」

「でもなぁ……」

空はそれから少し悩むとこう言った。

「なら、花瓶の花が枯れてきたりしたらにしてくれ。あまり払わせたくないのだ。」

俺はその言葉に渋々納得した。しかし、実際はおばさんによってちよくちよく花束は変えられていて、なかなか俺が新しい花を持って行く機会はなかった。

「あつやつと出てきた。」

内藤が店から出てきた津出を見つけた。津出の手には綺麗に纏められた花束が握られていた。

「あ、内藤この花束あなた持ちね。」

「えっ、ま、まじですか!？」

「冗談に決まってるじゃないっ！」

「だいたいそれじゃあなたからの花束になっちゃうでしょっ！」

「ほれ、バカップル行くぞ。」

俺はそう言つとペダルを踏みしめた。後ろからは津出が何かしら叫んでいるのが聞こえた。

少し長めの坂を一気に駆け上がると、真っ白い清潔感漂う建物がすぐに見えた。冬が近づき、寒くなったとは言え、敷地内の芝生では散歩をしている人などがまだまだいた。

その光景は一瞬本当にこの建物が病院なのか俺を困惑させた。

「燈也どうした？」

「何でもねーよ。」

一瞬呆けてしまった俺はすぐに内藤の後を追って、駐輪場へと向かった。

俺達はそのまま外来患者用の出入り口ではなく、入院患者のお見舞い用の出入り口から中に入った。さっさとエレベーターホールに向かい、乗り込む。もう見慣れたエレベーターで上へと向かう。途中の階で誰も乗り込んで来る事はなく、すぐに到着した。

病室に入る前に、手を良く洗って、アルコールで除菌する。

そして目の前のドアをノックした。

「はい。」

「あっ！」

聞き慣れた2つの声が部屋から聞こえてきた。俺がドアを開けた瞬間に鷗ちゃんが俺へと飛び込んできた。

「いにいに、こんにちは。」

「おっ鷗ちゃん、こんにちは。」

俺が鵜ちゃんに抱きつかれたまま体をどかして、津出と内藤が入ってこれるようにする。

「空、お見舞い来たわよっ！」

「冷河、やつほー」

「お、津出に内藤じゃないか。元気だったか？」

「入院してる人が言う言葉じゃないでしょっ！」

「フフ…そうだな。」

津出と話をしている空はやはり嬉しそうだった。

「そうそう、これお見舞いの。」

「そんな気を使わなくていいのに。」

「いいんだって。」

「津出、ありがとな…」

「気にしないのっ！」

「なあ…冷河…」

2人の会話を聞きながら、全員のパイプ椅子を持ってきていた内藤が空へ話しかけた。こういうさりげない気配りができる所は内藤の良いところだと思う。

「一応、それ俺からもね…」

「そうだったか、内藤もありがとう。」

俺に抱きついてキヤツキヤツしてる鵜ちゃんの頭をクシャツと撫で、ゆっくりとパイプ椅子に腰を下ろした。

「鵜、挨拶をしなさい。」

俺はその空の言葉を聞いて、苦笑してしまった。俺を見ていた空が不思議そうな顔でどうした？、と尋ねてきた。

「いや、空が鵜ちゃんの母親みたいだなー、と。」

「え！？この子空と燈也の子供！？」

内藤がいきなり素っ頓狂な声を上げた。

「そんな事ある訳ないでしょっ！」

津出がバシツと内藤を叩いた。

「こらこら、鵜が怖がってるじゃないか…」

いつの間にか鷓ちゃん俺の腰にギュツと抱きついてた。

「鷓、今度こそ挨拶しようか。」

「は、はい。」

そう言つて、鷓ちゃんはまだ緊張した様子で自己紹介をし、その後にぺこりと頭を下げた。

「まだ緊張してゐるな。」

鷓ちゃんは俺から離れてテクテクと空の所へと進んだ。空はひよいと持ち上げ、ベッドの上に座らせた。

「大丈夫、2人共優しいお姉さんとお兄さんだからな。」

「鷓ちゃん、あのお兄さんは好きに使つていいのよ。」

津出が笑顔で鷓ちゃんの近くのパイプ椅子に腰を下ろした。

「おいで。」

津出が鷓ちゃんへと手を伸ばす。その行動を見て、鷓ちゃんが空を確認する。空はゆつくりと笑顔で頷いた。すると鷓ちゃんは空から離れると、嬉しそうにぴょんと津出の膝の上に座った。

「何か妹ができたみたいね。」

津出が鷓ちゃんの頭を撫でながら言った。

「妹…響きがいいな…」

今まで無言だった内藤がぼそりと呟いた。

「鷓…」

「鷓ちゃん…」

ほぼ同時に声を出した空と俺を不思議そうにキョロキョロと見比べた。

「はい？」

「あいつには気をつけなさいよ。」

最後に津出は鷓ちゃんへと注意を促した。鷓ちゃんは津出の顔を確認した後、内藤へと一度目をやってから満面の笑みで答えた。

「はい。気をつけます。」

「ちよっ！！ひでえ！！」

誰かが急に吹き出した。それが引き金になって全員が笑い出した。

唯一鷓ちゃんだけがなぜ俺達が笑っているのか分からないように、キョトンとしていた。

「…涼華ねえ。」

「何？鷓ちゃん？」

「ただ呼んだだけです。」

「エヘツと鷓ちゃんは笑いながら言った。」

「んゝかあわあいゝなゝもうっ！」

津出は鷓ちゃんの顔に頼ずりをしだした。俺と空、内藤はその様子を話しながら眺めていた。

「涼華ねえ、こしょばゆいです。」

「だって鷓ちゃんが可愛いんだもんっ！」

（津出、それは理由になってないぞ…）

意味の分からない理由を言った後に津出は今度は鷓ちゃんをギュッと抱き締めていた。

「涼華ねえ…あったかいです…」

「なあ、空…」

俺は横目で津出と鷓ちゃんを見ながら、空のベッドに近づいた。

「どうした？」

空はそう言いながら、ベッドの上を少し動いて俺が腰を下ろせるようにしてくれた。俺はその空けてくれたスペースにゆっくりと腰を下ろした。

「んゝ何となくな…」

「ありがとう。」

ベッドに置いた俺の右手の上に空は左手をそっと重ねてきた。

俺は左手で空の左手を持ち上げると、右手を上向きにして、空の手をゆっくりと重ねた。そして、壊さないようにそっと握った。

「フフ…」

空の柔らかい声が俺の耳をくすぐる。

ゆっくりと部屋を見渡すと、津出はまだ鷓ちゃんを膝の上に置いた

まま仲良く話していて、内藤はその様子を優しい笑顔で眺めていた。

俺はそのまま目を閉じた。俺の肩に微かな重みが乗ってきた。
肩に温もりを感じた。手にも温もりを感じた。
空の温もりは俺から離れなかった。

【第十八話／木漏れ日の温もり】（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございます

皆さん今年の夏はどうですか？

自分は夏休みの真っ最中ですが、平日より忙しい日々が続き、まとまった時間が確保出来ません…

はい、またいつもの言い訳ですw

…いや、実際忙しいんですよ？（本当ですよ？w

こんな更新ペースでもこの物語の読者が毎日0人の日が絶対無いってのは本当に嬉しい事ですし、やる気にも繋がります

毎度毎度の事ですが、本当に皆さんありがとうございます
次話も登場人物含めこんな作者を宜しく願います

でわ、次話でまた会いましょうー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5775c/>

Cool Sky

2010年12月4日15時00分発行